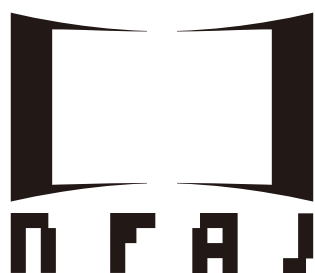


ANNUAL REPORT

National Film Archive of Japan, 2020

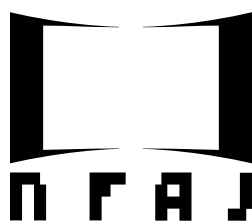
令和2年度 国立映画アーカイブ活動報告



ANNUAL REPORT

National Film Archive of Japan, 2020

令和2年度 国立映画アーカイブ活動報告



目 次

I 作品収集・復元等

1	作品収集	2	——	1-1	映画フィルム
		3	——	1-2	映画関連資料
2	保存／復元	4			
3	カタログイング／ドキュメンテーション	6			

II 公衆への観覧

1	上映会等	7	——	1-1	入場者数	1-1-1	上映会	1-1-2	展覧会
		8	——	1-2	上映会	1-2-1	令和2年度上映会記録		
		18	——	1-3	展覧会	1-3-1	令和2年度展覧会記録		
		21	——	1-4	共催事業	1-4-1	共催による館外上映会		
2	優秀映画鑑賞推進事業	29							
3	所蔵品へのアクセス	35							

III 調査研究 39

IV 教育普及

1	普及活動	41	——	1-1	資料の収集および図書室の公開		
		41	——	1-2	学校や社会教育施設への幅広い学習機会の提供		
		41	——	1-3	児童生徒を対象とした事業		
		42	——	1-4	講演会・シンポジウム・ギャラリートーク等		
				1-4-1	講演会・シンポジウム	1-4-2	ゲストトーク
				1-4-3	ギャラリートーク		
		45	——	1-5	大学等との連携		
2	刊行物	46	——	2-1	カタログ		
		46	——	2-2	目録・ガイド等		
		47	——	2-3	NFAJ プログラム等	2-3-1	NFAJ プログラム
				2-3-2	展覧会チラシ	2-3-3	上映会チラシ
		50	——	2-4	NFAJ ニュースレター		
		51	——	2-5	その他		
3	広報	52	——	3-1	美術館情報システムによる普及・広報		

V 記録

1	予算	53	——	1-1	2020 年度（令和 2 年度）歳出予算一覧	
2	名簿	54	——	2-1	評議員	2-2 職員

I 作品収集・復元等

1 作品収集 Acquisition

1-1 映画フィルム Films

国立映画アーカイブでは、映画を芸術作品のみならず、文化遺産として、あるいは歴史資料として、網羅的に収集することを目標に、日本映画の収集を優先しながら、時代を問わず散逸や劣化、滅失の危険性が高い映画フィルム等及び上映事業や国際交流事業に必要な映画フィルム等を収集している。なお、収集にあたっては、自主製作映画等企業の管理下に置かれない映画の収集にも配慮することとし、受贈については、デジタル素材の受入れも視野に入れながら、映画のデジタル化に伴い散逸の危機に瀕している原版やプリントの受入れも重点的に実施している。

令和2年度は特に以下の点について留意した。

ア 歴史的に重要な映画作品のデジタル復元を実施する。

イ フィルム、デジタルともにオリジナルフォーマットを優先した収集を行う。

企画上映に伴う映画フィルム等の購入に関しては、松竹映画の100年間の足跡を振り返る上映企画「松竹第一主義 松竹映画の100年」に関連して、『風雲金比羅山』(1950年)等23作品、30本のフィルムを購入した。また、戦後の日本映画を代表するスターとして活躍した三船敏郎(1920-1997)の生誕100年を回顧した上映企画「生誕100年 映画俳優 三船敏郎」に関連して、『黒部の太陽』(1968年)等6作品、6本のフィルムを購入した。さらに1980年代の日本映画を回顧する上映企画「1980年代日本映画―試行と新生」では、『生きてるうちが花なのよ 死んだらそれまでよ党宣言』(1985年)や『ウンタマギルー』(1989年)等、独立系のプロダクションが1980年代に製作した作品を中心に、14作品、14本のフィルムと、『風たちの午後』(1980年)のデジタル上映用及び保存用素材を購入した。

また、寄贈では、本年度の映画フィルムの寄贈受入本数は553本、67件であった。『ライブイン茅ヶ崎』(1978年、8mm)をはじめ森田芳光監督の自主映画時代の16作品、16本の原版や、石井輝男監督の『ねじ式』(1998年)や『地獄』(1999年)等3作品、14本の原版など、1970年代以降の個人映画や独立系プロダクション作品の原版寄贈を受けたことが大きな特徴である。また、日本最初の映画カメラマンである浅野四郎が撮影した『日本橋』(1897-1899年頃)や『浅草観音』(1897-1899年頃)等の可燃性のフィルムコマ4本が日本大学芸術学部映画学科から寄贈された(当館の配信サイト「映像でみる明治の日本」の【ギャラリー】高精細画像で甦る日本映画のルーツで公開中である)。さらに松竹蒲田草創期の撮影技師・田中欽之の遺族から寄贈された『田中欽之葬儀』(1937年)等、希少価値の高い戦前の映画に関してコレクションの欠落を補うことができた。

令和2年度映画フィルム収集本数

種別(genre)	購入(purchase)	寄贈(donation)	総本数(total)
日本映画			
劇映画	79	201	280
文化・記録映画	10	210	220
アニメーション映画	1	18	19
ニュース映画	0	4	4
テレビ用映画	0	43	43
小計	90	476	566
外国映画			
劇映画	0	28	28
文化・記録映画	0	42	42
アニメーション映画	0	7	7
ニュース映画	0	0	0
テレビ用映画	0	0	0
小計	0	77	77
合計	90	553	643

National Film Archive of Japan (NFAJ) aims to build a comprehensive collection of films not only as works of art, but also as cultural heritage or historical documents. While giving priority to Japanese films, NFAJ collects films of any period that are at high risk of being lost, suffering deterioration, or destruction, as well as those necessary for screenings and international exchange programs. NFAJ also gives consideration to films that are not under the control of film studios, such as independent

films. With regard to the acceptance of donations, NFAJ is considering acquiring digital materials, while also focusing on original negatives and prints that are in danger of being lost due to the digitalization of cinema.

NFAJ concentrated on the following points in fiscal year 2020.

- a. Undertaking digital restorations of historically important films.
- b. Prioritizing the acquisition of both analog and digital materials in their original formats.

Purchased films etc. for screening programs included 30 films of 23 titles such as “Fuun Konpira-san” (1950) for the program ‘Shochiku Cinema at 100’ which looked back at the 100-year history of Shochiku Co., Ltd., and six films of six titles including “Kurobe no taiyo [The Sands of Kurobe]” (1968), for the program ‘Toshiro Mifune Retrospective at His Centenary’ which was a retrospective of the 100th anniversary of the birth of Toshiro Mifune (1920-1997), one of the leading stars of postwar Japanese cinema. Regarding independent productions in the 1980s, NFAJ acquired 14 films of 14 titles, such as “Ikiteru uchi ga hana nanoyo shindara soremadeyo tou sengen” (1985) and “Untamagiru” (1989), for the program ‘New Challenges: Japanese Films in the 1980s’ which was a retrospective of Japanese cinema in the 1980s, as well as digital projection and preservation materials of “Kazetachi no gogo [Afternoon Breezes]” (1980).

A total of 67 donations in fiscal year 2020 brought in 553 films. Noteworthy titles were 16 original negatives of 16 titles directed by Yoshimitsu Morita in his independent era such as “Live in Chigasaki” (1978, 8mm), 14 original negatives of three titles of personal films and independent productions since the 1970s directed by Teruo Ishii such as “Nejishiki [Screw Style]” (1998) and “Jigoku: Japanese Hell” (1999). Also, four strips of nitrate frames shot by Shiro Asano, the first cinematographer in Japan, such as “Nihonbashi” (c. 1897-1899) and “Asakusa kannon” (c. 1897-1899) were donated by the Department of Cinema at Nihon University College of Art (they are accessible at NFAJ’s online streaming site ‘The Meiji Period on Film’ “Gallery”: The Roots of Japanese Cinema Revived in High-Resolution Images). Together with rare and valuable pre-war films such as “Kinshi Tanaka’s funeral” (1937) donated by the family of camera operator Kinshi Tanaka, NFAJ was able to fill in gaps in the collection.

1-2 映画関連資料 Non-film Materials

映画資料については、日本映画に関わるものを中心に、作品レベルでの網羅性を向上させるとともに、映画史の調査研究に資する幅広い種類の資料の収集を行っている。令和2年度は横田雅夫氏より先駆的映画実業家横田永之助の映写機ほか旧蔵品5点、井上かず子氏より撮影監督 宮島義勇旧蔵の東宝争議関係資料565点、東映東京撮影所よりフィルム撮影機14式などが挙げられる。

図書室では、映画文献に関する一定の網羅性を目指して、映画関連の新刊書と雑誌の収集を行うとともに、未所蔵の古書や戦前の雑誌など貴重な映画文献の購入、さらに一般の書籍流通ルートには乗らない刊行物の収集にも努めている。令和2年度は書籍、雑誌など未収蔵の文献を購入したが、中でも古書店からの購入として特筆すべきは日本映画黎明期の映画会社吉沢商店の発行した「北清事変写真帖」(1901年)や、「蒲田」「エスエス」「ぼいんとファン」など戦前期の映画雑誌である。

NFAJ collects a wide variety of non-film materials, mainly those related to Japanese films, to improve comprehensiveness in terms of the number of titles, and to contribute to the research and study of film history. Noteworthy materials in fiscal year 2020 included; five items from Masao Yokota, which were formerly owned by pioneer film businessperson Einosuke Yokota, including his film projector, 565 items of materials related to the Toho Labor Dispute from Kazuko Inoue, which were formerly owned by cinematographer Yoshio Miyajima, and 14 film projector units from Toei Movie Studios.

NFAJ’s library collects new movie books and journals in order to achieve a certain level of comprehensiveness, as well as purchasing valuable books and prewar journals that are not stored yet, and moreover collects publications that are not available through the general book distribution system. Notably in fiscal year 2020 NFAJ purchased, amongst other books and journals that were not already in the collection, ‘Photo album of the Boxer Rebellion’ (1901) published by Yoshizawa Shoten, a film company at the dawn of Japanese cinema, and prewar film magazines such as ‘Kamata’, ‘Esuesu’, and ‘Pointo Fan’ from antiquarian bookshops.

今年度は4本の映画フィルムのデジタル復元を実施した。第一に、1899（明治32）年に九代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎の至芸を記録した『紅葉狩』について、二度目のデジタル復元を実施し、最長版を作成した。当館が2006年に日活株式会社から寄贈を受けた可燃性35mm白黒デュペネガ（1927年製造）は、2009年に映画フィルムとして初めて国の重要文化財の指定を受けるとともに、同デュペネガを復元元素材として、最初のデジタル復元が実施された。しかし2018年に映画史家の本地陽彦氏が所有する可燃性35mmプリントについて調査を実施したところ、『紅葉狩』[日活版]より多くの欠落部分が認められるものの、オリジナルに近い世代のフィルムであることが明らかになった。今回の新たな復元では『紅葉狩』[本地版]を主素材として、その欠落部分を『紅葉狩』[日活版]で補った。第二に、ドイツ・キネマテークと『除夜の悲劇』（1924年、ルプ・ピック監督）の[デジタル復元・最長版]を3年がかりで共同復元した。当館が35mm可燃性ポジの4Kスキャンデータを主素材として提供する一方、ドイツ・キネマテーク側では、このデータに欠落する部分について、オリジナルの脚本やクラウド・スプリングスハイムの楽譜等を参照しつつ、シネマテーク・フランセーズ等に残存するフッテージで補填し、最も完全なバージョンを回復させたうえで、修復作業を行った。最後に、山中貞雄監督の『丹下左膳餘話 百萬兩の壺』（1935年）のデジタル復元に際しては、原版提供及び技術的監修を行うとともに、『河内山宗俊』（1936年）のデジタル復元時には技術的監修のみ実施した。

映画関連資料については、国立映画アーカイブ設立に伴って一定の修復予算を確保できるようになり、またデジタル化作業を可能にする目的の修復も含めて、ポスター、雑誌、写真アルバムなどの専門家による修復に着手するとともに、アーカイブ用の資料保存ケースを購入して保存を図っている。またスタッフによる作業としても、必要な場合には、公開・貸出頻度の高いと思われる日本映画ポスターなどへの和紙を用いた簡易修復、脆弱なシナリオ等冊子に対する中性紙保存ケースの作成、接着したスチル写真の剥離作業やクリーニングなどの措置を講じている。

現在ノンフィルム資料のうち紙素材の資料は京橋の4階図書室と地下3階収蔵庫にて保管しているが、収蔵能力が限界に達しつつある。特に図書については評論家・研究者・映画業界人旧蔵の巨大な案件が相次いでおり、受領するのみで精一杯の状況を解決できていない。また大型の技術資料はすでに収蔵能力の限界に達しており、今後の寄贈受け入れを見合わせざるを得ない。図書・紙資料についても京橋の本部ビルでのこれ以上の保管が困難になっており、相模原分館の保存庫との役割分担を検討し、アクセスの容易さと保存水準のバランスのとれた保管計画を立案する必要がある。

京橋の地下収蔵庫については、本年度に同室内の棚の撤去工事を行い、保管場所の状況が多少緩和されたが、未整理資料の急増という趨勢ではさらなる対策が求められる。令和2年度は、映倫寄贈の合本シナリオのうち、非合本シナリオとの複本になっている分を相模原分館に移管した。

また寄贈品のうち、同一品を多数受領する印刷物に関しては全国の映画資料館への分配も行う方針である。

また、令和元年10月に発生した台風19号による川崎市市民ミュージアムの浸水被害に際し、川崎市からの要請により、映画フィルムおよび映画関係資料のレスキュー活動ならびに修復作業への助言を行った。研究員が、文化庁の「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」の検討委員として、検討委員会での提言やシンポジウムへの参加を通じ、映画関連資料のアーカイビング事業についての協力を行った。

修復件数

映画フィルムデジタル復元	4本
ノイズリダクション等	8本
不燃化作業	8本
映画フィルム洗浄	61本

In this fiscal year 2020, NFAJ has digitally restored four films. Firstly, as a result of the second attempt of digital restoration of “Momijigari”, a documentary film of the supreme artistry of Ichikawa Danjuro IX and Onoe Kikugoro V in 1899, the longest version was made. The 35mm nitrate dupe negative donated from Nikkatsu Corporation in 2006 (manufactured in 1927) became the first motion picture film designated as an Important Cultural Property of Japan, and the first digital restoration was carried out using the same dupe negative as the source material. However, in 2018, we examined a nitrate 35mm print owned by film historian Haruhiko Honchi and found out that the print was much closer to the original, though there were more parts missing than in the Nikkatsu version. The second restoration used the Honchi version as the main source material, and the missing parts were supplemented with the Nikkatsu version. Secondly, in cooperation with Deutsche Kinemathek, we completed a three-year long project of restoration of “New Year’s Eve” [digitally restored, longest version] (dir. Lupu Pick, 1924). We offered the 4K data scanned from the 35mm nitrate positive from our collection as the main source material, and Deutsche Kinemathek supplemented the missing parts with the surviving footage stored at Cinémathèque française and other institutions, while referring to the original script and Klaus Springheim’s music score, to make it the most complete and the longest version,

before carrying out repair work. Lastly, we provided the original material and technical supervision to the digital restoration of the film directed by Sadao Yamanaka, “Tange Sazen yowa: Hyakuman ryo no tsubo [The Million Ryo Pot]” (1935) and technically supervised the digital restoration of “Kochiyama Soshun [Priest of Darkness]” (1936).

Non-film materials have long been stored in an appropriate environment, however, with the establishment of the NFAJ, a certain amount of budget has become available for repair work. Thus, it became possible to undertake the repair of posters, magazines and photographic albums by specialists, including preparatory repair for future digitization. For preservation reasons, archival containers were also purchased. Where necessary, NFAJ’s staff members carry out simple repairs to Japanese movie posters that are frequently exhibited or loaned out, make acid-free paper containers for fragile scenarios and other booklets, and remove and clean glued still photographs.

Currently non-film materials on paper are kept at the library on the 4th floor and the storage space on the 3rd basement floor in the Kyobashi main building is reaching the limit of its capacity. NFAJ has not been doing anything beyond accepting the huge number of books formerly owned by critics, researchers, and people in the film industry one after another, and the problem remains unsolved. Moreover, bulky machinery has already reached the limit of capacity and we have had no choice but to suspend accepting donations. Books and other paper materials are also difficult to acquire any more in Kyobashi, so it is necessary to consider the division of roles between the Sagamihara Conservation Center and Kyobashi to make a well-balanced storage plan for better accessibility and high preservation standards.

In the Kyobashi basement storage room, the shelves in the room were removed during this fiscal year 2020, which eased the storage situation somewhat, but the rapid increase in the number of untouched materials requires further measures. Among the combined scenarios donated by Eirin, those which we already had uncombined copies of were transferred to Sagamihara.

In addition, NFAJ plans to distribute printed materials of which many copies exist in the collection to film museums across the country.

Other than the above, as Kawasaki City Museum was flooded due to Typhoon Hagibis in October 2019 NFAJ, at the request of the city, rescued their motion picture films and non-film materials, and gave them advice about their further treatment. As a member of the committee for the Agency for Cultural Affairs’ ‘Model Project for the Formation of Core Archiving Bases (for non-film materials related to film studios, etc.)’, our film curator cooperated with the project for the archiving of non-film materials by making proposals at the committee and participating in symposiums.

映画フィルムと映画関連資料については、所蔵品データベースNFAD (National Film Archive Database)への登録を随時進めている。また図書所蔵情報の公開については、新型コロナウイルスの影響で登録作業日が減少し、新着図書の登録が連年に比べて滞る傾向が見られた。新着書籍のオンライン目録への登録は例年通り行うことができたが、映画雑誌の登録は進められなかった。図書室運営についても、7月7日の再開館以降は、通常の週5日から開室日を減らして火曜から金曜までの週4日開室に、さらに1月に発された緊急事態宣言の影響で1月19日からは事前予約制を採用、週3日(火曜・木曜・土曜)の開室となった。

	公開レコード数	累計公開件数
所蔵映画フィルム検索システム	98件	7,752件

Motion picture films and non-film materials are being added to the NFAD (National Film Archive Database). Concerning accessibility to the data of library books, due to the effect of the new coronavirus, the amount of data input was reduced, and the registration of new books tended to be delayed compared to previous years. It was possible to register new books to the online catalog as usual, but not possible to proceed with the registration of film magazines. Since the re-opening on July 7, the library was open four days a week, Tuesday through Friday, instead of the usual five days a week, and since January 19, due to the emergency declaration issued the same month, the library was open three days a week (Tuesdays, Thursdays, and Saturdays) on an advance reservation system.

Ⅱ 公衆への観覧

1 上映会等 Screening Programs and Exhibitions

1-1 入場者数 Number of Visitors

会場	上映日数	プログラム数	上映作品数	上映回数	1回平均入場者数	入場者数
上映会(長瀬記念ホール OZU)	202日	234	271	449	101人	45,393人
上映会(小ホール)	41日	31	50	85	43人	3,696人
上映会計	243日	252*	308*	534	92人	49,089人

*2つのホールで上映したプログラム及び作品は、重複分を除いて合計を算出している。

展覧会開催日数	入館者数
209日	14,823人

1-1-1 上映会 Screening Programs

上映会番号(注)	上映会名	会場	入場者数(人)
25 / 427	松竹第一主義 松竹映画の100年	OZUホール	10,477
26 / 428	第42回びあフィルムフェスティバル	OZUホール	2,661
27 / 429	生誕100年 映画俳優 三船敏郎	OZUホール	5,810
28 / 430	35mmフィルムで見るクリント・イーストウッドの軌跡	小ホール	3,807
29 / 431	サイレントシネマ・デイズ2020	OZUホール	1,295
30 / 432	生誕100年 映画女優 原節子	OZUホール	5,817
31 / 433	生誕100年 映画女優 山口淑子	OZUホール	3,979
32 / 434	中国映画の展開——サイレント期から第五世代まで	OZUホール	5,130
33 / 435	1980年代日本映画——試行と新生	OZUホール	8,395
34 / 436	「再映：戦後日本ドキュメンタリー映画再考」 「川本喜八郎＋岡本忠成 アニメーション作品上映」	小ホール	1,718

(注)番号は、NFAJ上映会番号／NFC上映会からの通し番号

【注】感染症対策臨時休館のため、各上映会において会期及び開催日数が当初予定から変更となった。

1-1-2 展覧会 Visitors to Exhibitions

展覧会番号(注)	展覧会名	入場者数(人)
6 / 58	松竹第一主義 松竹映画の100年	2,274
7 / 59	公開70周年記念 映画『羅生門』展	5,120
8 / 60	川本喜八郎＋岡本忠成 パペット・アニメーション2020	2,735

(注)番号は、NFAJ展覧会番号／NFC展覧会からの通し番号

【注】感染症対策臨時休館のため、各展覧会において会期及び開催日数が当初予定から変更となった。

1-2-1 令和2年度上映会記録 Records of Screenings in Fiscal Year 2020

427 松竹第一主義 松竹映画の100年

100年に及ぶ歴史を持つ松竹映画を、1921年のサイレント作品から2006年の近年の作品まで、日本映画史を代表する作品や巨匠の作品、「松竹ヌーヴェルヴァーグ」と称された1960年代の革新的な作品をはじめ、さまざまなジャンル、監督、スター関わった多彩な79作品を、64プログラムにまとめて上映した。

Shochiku Cinema at 100

With Shochiku's history spanning 100 years, this event screened 79 diverse films in 64 programs. It included a variety of genres, directors, and stars, from silent films in 1921 to recent films in 2006, including representative works of Japanese film history, works by masters, and progressive works in the 1960s, known as 'Shochiku Nouvelle Vague'.



『島の娘』(1933年、野村芳亭監督)



『風雲金比羅山』(1950年、大曾根辰夫監督)

上映会番号

25 / 427

会 期

2020年7月7日～9月6日

会 場

長瀬記念ホール OZU

主 催

国立映画アーカイブ

企画協力

松竹株式会社

出品点数・番組

79点 / 64番組

上映日数・上映回数

54日 / 128回

入館者数

10,477人(1回平均82人)

新聞・雑誌等における掲載記事

朝日新聞夕刊 2020年6月25日掲載 「質の高い喜劇や人情味あふれるホームドラマ、「松竹ヌーベルヴァーグ」といわれた革新的な作品も生み出し、京都の撮影所では時代劇を量産した松竹映画の歴史をたどれる。」

428 第42回ぴあフィルムフェスティバル

国立映画アーカイブと一般社団法人PFF、公益財団法人ユニジャパン、公益財団法人川喜多記念映画文化財団の共同主催で開催した。フィルムセンター時代を含め、開催は11回目となる。映画祭のメイン事業であり世界最大の自主映画コンペティション「PFFアワード」をはじめ、インパクトのある映画を選定したユニークな特集上映や、映画人をゲストに招いたトークイベントも開催した。

42nd Pia Film Festival

NFAJ co-organized this festival with PFF General Incorporated Association, UNIJAPAN, and Kawakita Memorial Film Institute. This was the 11th time PFF had been held at NFAJ, including its NFC era. Other than 'PFF Award', the main event of the festival and the biggest competition in the world for independent films, uniquely curated special screenings of films with impact, and guest talk events were held with film related people.

上映会番号
26 / 428
会 期
2020年9月12日～26日
会 場
長瀬記念ホール OZU、小ホール
主 催
国立映画アーカイブ、一般社団法人PFF、 公益財団法人川喜多記念映画文化財団、 公益財団法人ユニジャパン
出品点数・番組
33点 / 22番組
上映日数・上映回数
12日 / 36回
入館者数
2,661人(1回平均74人)
新聞・雑誌等における掲載記事



PFFチラシ

429 生誕100年 映画俳優 三船敏郎

日本映画史を代表し、世界的にも知られる俳優・三船敏郎(1920-1997)の生誕100年を記念して、デビュー作『銀嶺の果て』(1947)から最後の出演作『深い河』(1995)まで計27作品(27プログラム)によってその足跡を回顧した。俳優の特集としては2015年度の「生誕110年 映画俳優志村喬」に続くものである。

Toshiro Mifune Retrospective at His Centenary

In commemoration of the 100th anniversary of the birth of Toshiro Mifune (1920-1997), a world-famous actor who represents Japanese film history, this event recounted his career through a total of 27 films (27 programs), from his debut “Ginrei no hate [Snow Trail]” (1947) to his last film “Fukai kawa [Deep River]” (1995). As an event featuring an actor, this follows on from ‘Film Actor Takashi Shimura’ in fiscal year 2015.

上映会番号
27 / 429
会 期
2020年10月2日～22日
会 場
長瀬記念ホール OZU
主 催
国立映画アーカイブ
出品点数・番組
27点 / 27番組
上映日数・上映回数
18日 / 54回
入館者数
5,810人(1回平均108人)

新聞・雑誌等における掲載記事

『リアルサウンド』(web) 2020年10月2日掲載 「現在、Amazon Prime Videoなどでも観ることは可能ですが、トンネル内の暗がりや、黒部の大自然、そして役者陣の熱演を堪能できるのはスクリーンしかありません。三船敏郎の生誕100年の今年、大きなスクリーンでその熱量を感じてほしいです。」

『週刊大衆』 2020年11月2日号 「特集上映で上映中の作品の中でも、ヤクザ役から野球選手まで、さまざまな三船の姿を観ることが出来る。また、今回は、黒澤明と組んだ三船の代表作ともいえる名作が数多く上映される。(略)この機会に“世界のミフネ”の名演技を目に焼きつけてほしい」



『馬喰一代』(1951年、木村恵吾監督)



『五十万人の遺産 LEGACY of the 500,000』
(1963年、三船敏郎監督)

430 35mmフィルムで見るクリント・イーストウッドの軌跡

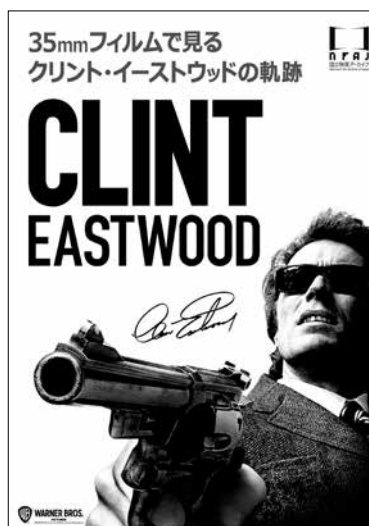
ワーナー ブラザース ジャパン合同会社との共催企画で、俳優・監督として世界的に高い評価を受け続け、2020年に90歳の誕生日を迎えたクリント・イーストウッドの数ある監督作品・主演作品の中から、同社所蔵の35mmフィルム13作品を上映した。すべて35mmフィルムによる上映であることが本企画の最大の特徴である。また、『硫黄島からの手紙』は英語字幕付き、『父親たちの星条旗』は日本語吹替版のフィルムの上映も行った。

Clint Eastwood on 35mm

Clint Eastwood has received worldwide acclaim both as an actor and director and celebrated his 90th birthday in 2020. Co-hosted with Warner Bros. Japan LLC, this program screened 13 titles in their collection, selected from many films directed by or starring him. The main feature of this program was that all the titles were screened on 35mm prints. In addition, “Letters from Iwo Jima” was also shown with English subtitles, and “Flags of Our Fathers” was also shown in a Japanese dubbed version.

上映会番号
28 / 430
会 期
2020年10月29日～12月6日
会 場
長瀬記念ホール OZU、小ホール
主 催
国立映画アーカイブ、 ワーナー ブラザース ジャパン合同会社
出品点数・番組
13点 / 13番組
上映日数・上映回数
33日 / 74回
入館者数
3,807人(1回平均51人)
新聞・雑誌等における掲載記事

『週刊文春』2020年11月26日号 「(『ブラッド・ワーク』を公開当時映画館で見てから)二十年近くが経ち、再びスクリーンで見直すことができた。貴重な機会をくれたのは、国立映画アーカイブでのクリント・イーストウッド特集。」



イーストウッド

431 サイレントシネマ・デイズ2020

世界各地で開催されている無声映画祭と同様に、普段なかなか目にすることのない弁士の説明や生演奏を付けて無声映画を鑑賞できる恒例企画である。今回は国立映画アーカイブの所蔵映画から、外国映画6プログラム(9作品)を上映した。

Silent Film Days 2020

As with silent film festivals held around the world, this is an annual event giving rare opportunities to screen silent films with benshi performance and live music for the audience. This time it showed six programs (nine foreign films) from NFAJ's collection.



『ヘルズ・ヒンジズ』(1916年、ウィリアム・S・ハート監督)

上映会番号
29 / 431
会 期
2020年11月10日～15日
会 場
長瀬記念ホール OZU
主 催
国立映画アーカイブ
協 力
株式会社橋本ピアノ
出品点数・番組
9点 / 6番組
上映日数・上映回数
6日 / 12回
入館者数
1,295人(1回平均108人)
新聞・雑誌等における掲載記事
『シネマブレティン』(web) 2020年10月15日 「6プログラムともすべてサスペンスとスリルあふれる必見の海外作品がラインナップされている」

432 生誕100年 映画女優 原節子

黒澤明、小津安二郎、成瀬巳喜男といった名匠の傑作群に重要な貢献を果たし、日本映画史のみならず世界的にも伝説的なスターとして知られている女優・原節子(1920-2015)の生誕100周年を記念して、現存する最古の作品である『魂を投げろ』(1935)から、最後の出演作となった『忠臣蔵 花の巻・雪の巻』(1962)まで、計23作品(22プログラム)を上映することにより、その偉大な業績を回顧した。女優を取り上げた企画としては、「女優 山田五十鈴」(1995年度)、「映画女優 高峰秀子」(2004年度)、「生誕百年 映画女優 田中絹代」(2009年度)、「映画女優 香川京子」(2011年度)に連なるものである。

Setsuko Hara Retrospective at Her Centenary

Setsuko Hara (1920-2015) is known as a legendary star actress not only in the history of Japanese cinema but also in the world, having contributed to the eminent works of such masters as Akira Kurosawa, Yasujiro Ozu, and Mikio Naruse.

Celebrating the 100th anniversary of her birth, this event looked back on her glamorous career by showing a total of 23 films (22 programs) from her oldest surviving film “Tamashii o nagero” (1935), to her last appearance “Chushingura: Hana no maki, yuki no maki” (1962). As a series of events featuring actresses, it followed on from ‘Isuzu Yamada, Our Actress’ (1995), ‘Hideko Takamine, Film Actress’ (2004), ‘Film Actress Kinuyo Tanaka at Her Centenary’ (2009), and ‘Kyoko Kagawa Retrospective’ (2011).



『河内山宗俊』(1936年、山中貞雄監督)



『白痴』(1951年、黒澤明監督)

上映会番号
30 / 432
会 期
2020年11月17日～12月11日
会 場
長瀬記念ホール OZU
主 催
国立映画アーカイブ
出品点数・番組
23点 / 22番組
上映日数・上映回数
22日 / 44回
入館者数
5,817人(1回平均132人)
新聞・雑誌等における掲載記事
『ハーバース・バザー』 2021年1月号 「日本人離れした美貌と気品を誇り、日本映画の黄金期を担った俳優、原節子は、42歳の若さで引退し、半世紀にわたり隠遁生活を送った。孤高の俳優の生誕100周年を記念し、デビュー時から最後の出演作まで23作品がスクリーンに蘇る。(略) 綺羅星のような監督たちの23作品に今なお息づく清廉な魂を見つめたい。」

433 生誕100年 映画女優 山口淑子

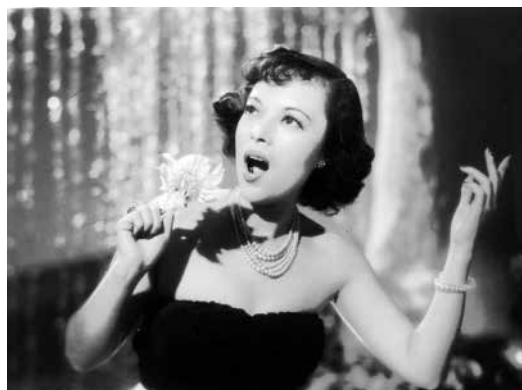
女優・山口淑子(1920-2014)の生誕100年を記念して、戦前の『支那の夜』(1940)から戦後の『白夫人の妖恋』(1956)まで14作品を上映することにより、激動の時代を生きた女優の軌跡を再評価した。女優を取り上げた企画としては、「女優 山田五十鈴」(1995年度)「生誕百年 映画女優 田中絹代」(2009年度)「映画女優 香川京子」(2011年度)に連なるものである。

Yoshiko Yamaguchi Retrospective at Her Centenary

In commemoration of the 100th anniversary of the birth of actress Yoshiko Yamaguchi (1920-2014), this event re-evaluated the trajectory of the actress who lived through a turbulent era, by screening 14 films from the prewar “Shina no yoru [China Nights]” (1940) to the post-war “Byaku fujin no yoren [The Legend of the White Serpent]” (1956). As a series of events featuring actresses, it followed on from ‘Isuzu Yamada, Our Actress’ (1995), ‘Film Actress Kinuyo Tanaka at Her Centenary’ (2009), and ‘Kyoko Kagawa Retrospective’ (2011).



『サヨンの鐘』(1943年、清水宏監督)



『情熱の人魚』(1948年、田口哲監督)

上映会番号
31 / 433
会 期
2020年12月12日～27日
会 場
長瀬記念ホール OZU
主 催
国立映画アーカイブ
出品点数・番組
14点 / 14番組
上映日数・上映回数
14日 / 28回
入館者数
3,979人(1回平均142人)
新聞・雑誌等における掲載記事
『夕刊フジ』 2020年12月9日 「12月からレジェンド女優の特集上映が開催(略)『情熱の人魚』(48年、田口哲監督)では歌姫としての山口がこの上なく輝いている。(略)戦後の明るい未来に向かっての熱気が感じられる作品だ。」

434 中国映画の展開——サイレント期から第五世代まで

中国電影資料館との共同により、サイレント期から「第五世代」までの中国映画の代表作を計29作品(24プログラム)上映した。上映作品29本のうち、21本は中国電影資料館から借用し、8本は所蔵作品を上映した。所蔵作品のうち『嵐の夜』(1925)は日本初上映となった。

Tracing the Chinese Cinema : from the Silent Era to the Fifth Generation

In collaboration with the China Film Archive, a total of 29 films (24 programs) of representative Chinese films from the silent era to the 'Fifth Generation' were screened. Amongst the 29 films screened, 21 were borrowed from the CFA and eight films were from our collection. One of the films in our collection, "The Stormy Night" (1925) was shown for the first time in Japan.

上映会番号
32 / 434
会 期
2021年1月5日～2月14日
会 場
長瀬記念ホール OZU
主 催
国立映画アーカイブ、中国電影資料館
協 力
株式会社橋本ピアノ
出品点数・番組
29点 / 24番組
上映日数・上映回数
30日 / 50回
入館者数
5,130人(1回平均103人)
新聞・雑誌等における掲載記事

『pen』 2021年2月1日号 「中国電影資料館との共同で、サイレント期から「第五世代」までの中国映画の名作や代表作を上映。現存する最古の作品『八百屋の恋』(1922)や、上海を中心に先進的な映画文化が開花した30年代の数々の名作、戦争の傷跡と新中国建設への希望を描いた40年代後半から50年代にかけての作品などの貴重な映像が揃う。」

日経電子版(web) 2021年1月14日掲載 「中国は米国にならぶ映画市場に急成長する一方、個性的な新鋭監督を輩出している面でも注目を集めている。そんな中国映画は今日までどのような変遷をたどってきたのか。国立映画アーカイブの「中国映画の展開—サイレント期から第五世代まで」は、(略)中国映画の変化を知る企画上映だ。(略)ユニークなのは過去の名作選にとどまらないラインアップになっていること。」



『八百屋の恋』(1922年、張石川監督)



『祝福』(1956年、桑弧監督)

435 1980年代日本映画——試行と新生

当館が近年開催している「現代日本の映画監督」シリーズや佐々木史朗、黒澤満といった映画プロデューサーの特集をふまえ、時代の新しい流れを示した作品や社会的に話題となった作品など計44本(42プログラム)によって、1980年代の日本映画を回顧した。時代別の特集としては、1996年から2002年にかけて開催した上映シリーズ「日本映画の発見」に続くものであり、現代日本映画の起源であるこの時期の作品を幅広い世代に紹介し、再評価を促すことがねらいである。

New Challenges : Japanese Films in the 1980s

Based on the NFAJ's recent 'His/Her Own Selection' series and special screenings on film producers such as Shiro Sasaki and Mitsuru Kurosawa, this retrospective of Japanese films of the 1980s featured 44 films (42 programs), including those that showed new currents of the era and were social sensations. This was following on from the period-specific series 'Rediscovering Our National Film Heritage' held from 1996 to 2002, and aimed to introduce the works of this period, the origin of contemporary Japanese cinema, to a wide range of generations and encourage their re-evaluation.



『泥の河』(1981年、小栗康平監督)



『竜二』(1983年、川島透監督)

上映会番号
33 / 435
会 期
2021年2月16日～5月5日
会 場
長瀬記念ホール OZU
主 催
国立映画アーカイブ
出品点数・番組
44点 / 42番組
上映日数・上映回数
36日 / 72回
入館者数
8,395人(1回平均117人)
新聞・雑誌等における掲載記事
『読売新聞』 2021年2月12日(金)夕刊 「(1980年代特集は)5月5日まで約3か月にわたり計44本を上映し、この時代の日本映画界で生まれたものを検証する試みだ。」

436 「再映：戦後日本ドキュメンタリー映画再考」 「川本喜八郎＋岡本忠成 アニメーション作品上映」

2020年度の企画「戦後日本ドキュメンタリー映画再考」のうち、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため上映中止となった2月29日(土)から3月8日(日)までの上映回を再上映した。また、同時期開催の展覧会に関連した企画として、立体アニメーション作家である川本喜八郎と岡本忠成の代表的作品を上映した。

‘Rethinking Postwar Japanese Documentary Films’ ‘Kihachiro Kawamoto and Tadanari Okamoto, Puppet Animation Filmmakers’

From the program in fiscal year 2020, ‘Rethinking Postwar Japanese Documentary Films’, NFAJ rescheduled the screenings from Feb. 29 (Sat) to March 8 (Sun), which had been cancelled to prevent the spread of Covid-19. In addition, as a program related to the exhibition held at the same time, representative works by stop-motion animation artists Kihachiro Kawamoto and Tadanari Okamoto were screened.



『草とり草紙』(1985年、福田克彦監督)



『おこんじょうり』(1982年、岡本忠成監督)

上映会番号
34 / 436
会 期
2021年2月19日～3月28日
会 場
小ホール
主 催
国立映画アーカイブ
出品点数・番組
37点 / 18番組
上映日数・上映回数
18日 / 36回
入館者数
1,718人(1回平均48人)
新聞・雑誌等における掲載記事
『映画ナタリー』(web) 2021年2月17日(金) 掲載 「同企画は2020年1月より行われたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって会期中で中止となっていた。このたび原一男が別れた恋人の人生を捉えた「極私的エロス・恋歌1974」、黒田輝彦が手がけた「ザ・サカナマン ―漁師カメラマンの現状報告―」、柳町光男が暴走族の一大勢力グループ「ブラックエンペラー」を追った「ゴッド・スピード・ユー BLACK EMPEROR」など20作品16プログラムがスクリーンにかけられる。」

1-3-1 令和2年度展覧会記録 Records of Exhibitions in Fiscal Year 2020

58 松竹第一主義 松竹映画の100年

1920年の創立以来、戦災などの社会的危機を乗り越えて100年にわたり、映画製作を続けてきた松竹映画の歴史を、時代をたどる形で展示を構成した。出品資料や全体の構成については、フィルムセンター時代の2006年に開催された企画展「松竹と映画」を参考として一部重要資料は重複して展示したものの、今回は近年収蔵され、本展での展示が初公開となった資料も含め、出品数自体は40点以上増加し、草創期から戦時期にかけての資料や、松竹映画の海外展開の紹介などで内容の充実を図った。

展示は5つの章で構成し、前半の2つの章では、1930年代半ばの蒲田から大船への撮影所移転で区切って創立から終戦までを扱い、その後は昭和の終わりまでを、日本映画界だけでなく社会的に大きなインパクトを与えた「松竹ヌーヴェルヴァーグ」が登場した1960年頃で分けて2つの章で構成し、最後に平成以降を紹介した。

Shochiku Cinema at 100

This exhibition was organized to trace the history of Shochiku Co., Ltd., which has been producing films for 100 years since its establishment in 1920, overcoming social crises such as war damage. Some of the most important materials overlapped with the 2006 exhibition 'Shochiku in the History of Japanese Cinema' held at the NFC, however, the number of items increased by more than 40, including some that were recently acquired and displayed for the first time. The exhibition was divided into five chapters.

The first two chapters dealt with the period from the establishment of Shochiku to the end of the war, separated by the relocation of the studio from Kamata to Ofuna in the mid-1930s. The next two chapters covered the period up to the end of the Showa era, divided by the 1960s, when the 'Shochiku Nouvelle Vague' appeared, which had a major impact not only on the Japanese film industry but also on society. The final chapter introduced the Heisei-era onwards.



展覧会番号

6 / 58

会 期

2020年7月7日～ 8月30日

会 場

主 催

国立映画アーカイブ

企画協力

松竹株式会社

出品点数

184点

開催日数

48日

入館者数

2,274人(1回平均47人)

新聞・雑誌等における掲載記事

『東京新聞』 2020年8月18日(金)朝刊掲載
 『松竹映画 京橋で企画展』
 『週刊大衆』 2020年8月17日号掲載 『展覧会
 「松竹第一主義 松竹映画の100年」が開催中』

59 公開70周年記念 映画『羅生門』展

1950年公開の『羅生門』は、監督黒澤明の芸術的な野心が認められ、翌年のヴェネチア国際映画祭での金獅子賞受賞などを通じて国際的な評価を確立、黒澤の、ひいては日本映画の水準の高さを世界に知らしめ、戦後復興のひとつの象徴にもなった。

『羅生門』は、黒澤の演出力だけでなく、それまでの日本映画の作り方を革新した数々のスタッフワークに支えられており、それぞれの職能の大胆な取り組みによるアンサンブルがこの映画の醍醐味となっている。この展覧会では、世界初展示の品も含め、名スタッフ達の功績の実際をデジタル展示も用いて紹介したほか、三船敏郎・京マチ子・森雅之・志村喬といった名優にも注目しさらにはヴェネチアでの受賞をめぐる資料やこの映画の世界への影響についても触れた。また世界各国の『羅生門』ポスターのコーナーは、当館開館記念のポスター展「旅する黒澤明」(2018年)との連結も意図した。

Rashomon at the 70th Anniversary

Akira Kurosawa's "Rashomon" released in 1950 attracted attention for Kurosawa's artistic ambitions and earned worldwide acclaim by receiving awards such as Venice International Film Festival's Golden Lion in 1951. As a result, the film put the high standards of Kurosawa and, by extension, Japanese cinema on the international map and became a symbol of the nation's post-war reconstruction.

"Rashomon" was created not only by Kurosawa's direction skills but also a supporting staff that brought revolutionary approaches unlike conventional Japanese filmmaking. This talented ensemble's daring efforts are the real appeal. In this exhibition, the actual achievements of the crew were introduced, with some items exhibited for the first time in the world, and with digital displays, too. In addition, it also focused on prominent actors such as Toshiro Mifune, Machiko Kyo, Masayuki Mori, and Takashi Shimura, as well as documents related to the award in Venice and the impact of the film on the world. "Rashomon" posters from around the world were displayed in a section that was intended to be connected to the 'Inaugurating NFAJ: Kurosawa Travels around the World' (2018).



展覧会番号
7 / 59
会 期
2020年9月12日～12月6日
会 場
国立映画アーカイブ 展示室
主 催
国立映画アーカイブ、京都府京都文化博物館、 映像産業振興機構
協 力
文化庁、株式会社KADOKAWA、 株式会社アイ・ティー・ワン
出品点数
103点
開催日数
74日
入館者数
5,120人(1回平均69人)
新聞・雑誌等における掲載記事
『東京民報』 2020年9月27日掲載 「日本映画史に残る傑作の魅力に多角的に迫っています」 『美術展ナビ』(web) 2020年9月16日掲載 「閉塞感がぬぐえない今の日本社会にもつうじるものがあるそう。戦後の混乱期、大胆に、新しいことに挑戦した黒澤たちの息吹を今改めて感じることも意義深いのではないだろうか」

60 川本喜八郎＋岡本忠成 パペット・アニメーション2020

川本喜八郎と岡本忠成は、ストップモーション撮影による立体アニメーションの分野で大きな功績を残した作家である。人形映画の先進国チェコスロヴァキアで学び直した川本は、端正なキャラクターに魂を吹き込み、テレビの歴史人形劇や外国との合作にも活路を見出した。一方で岡本は、平面・立体・半立体を自在に使い分け、多様な素材をアニメートして、主に教育映画の分野で創造性を発揮した。1970年代には、互いの作品上映と人形劇を組み合わせた「川本＋岡本 パペットアニメーション」を企画して話題を集めたが、そうした両作家の共同作業にも注目した。

当館はかねてから「造形作品でみる 岡本忠成アニメーションの世界」（2004年）や、両作家の師を取り上げた「人形アニメーション作家 持永只仁」（2017年）を開催してきたが、川本の没後10年、岡本の没後30年を期して再びこの分野に光を当て、その足跡をたどった。

Kihachiro Kawamoto and Tadanari Okamoto, Puppet Animation Filmmakers

Kihachiro Kawamoto and Tadanari Okamoto were artists who each left unparalleled achievements in stop-motion animation. Kawamoto polished his craft in Czechoslovakia, a leader in the puppet film genre. Then, pouring his soul into the fine-featured characters, he discovered new avenues for TV historical puppet dramas and collaboration with overseas artists. On the other hand, Okamoto demonstrated creativity primarily in the educational film genre by animating various materials with free and ingenious use of flat, three-dimensional, and semi-three-dimensional qualities. In the 1970s, they united to produce shows titled 'Puppet Animashow' that combined screenings of their works and puppet theater performances and attracted great attention.

This exhibition noted such cooperation attempts. NFAJ has long held 'Artworks from the Animation Films of Tadanori Okamoto' (2004) and 'Tadahito Mochinaga, Puppet Animation Filmmaker' (2017), honoring the mentors of both artists, but in 2020 on the 10th anniversary of Kawamoto's and the 30th anniversary of Okamoto's death, again shed light on this genre and retraced their footsteps.



展覧会番号
8 / 60
会 期
2020年12月19日～2021年3月28日
会 場
国立映画アーカイブ 展示室
主 催
国立映画アーカイブ
協 力
有限会社川本プロダクション、 株式会社エコー、 飯田市川本喜八郎人形美術館
企画協力
株式会社WOWOWプラス
出品点数
196点
開催日数
74日
入館者数
2,735人(1回平均37人)
新聞・雑誌等における掲載記事
シネマトゥデイ(web) 2020年12月22日掲載 『川本喜八郎没後10年、人形アニメの先駆者 二人のスゴすぎる作品展が開催』

1-4-1 共催による館外上映会 Co-organized Out-of-premises Screening Programs

MoMAK Films 2020

2009年度から開催している京都国立近代美術館との共催企画。本年度は、コロナ禍で企画展会期等の変更を受けながらも、6月の「ポーランドの映画ポスター展関連特集 ポーランドで愛された映画たち」を皮切りに、企画展関連上映を3回、巡回上映を1回、開催した。8月の「京(みやこ)のくらし——二十四節気を愉しむ 関連上映 相米慎二監督特集」では鑑賞希望者が多く、座席配置を工夫して定員超で開催する対応をした。11月の「人間国宝 森口邦彦 友禅/デザイン—交差する自由へのまなざし 関連上映 映画にみるパリの光と闇」では森口の留学先のパリを舞台にしたフランス映画を、2月の「中国映画の展開——女性たちの物語」では、当館上映企画の「中国映画の展開——サイレント期から第五世代まで」から女性を主人公とした3作品を紹介した。

MoMAK Films 2020

This is a joint series co-organized with the National Museum of Modern Art, Kyoto (MoMAK), which has been held since 2009. This fiscal year, despite changes in the exhibition schedule due to Covid-19, three exhibition-related screenings and one circulated screening were held, starting with 'Polish Posters for Films related screenings, Films Loved in Poland' in June. 'Life in Kyoto: Arts in Seasonal Delight related screenings, Film director Shinji Somai' in Aug. attracted over capacity crowds, so the seating arrangements were changed. 'MORIGUCHI Kunihiko: Yuzen / Design - Crossroads of Creativity related screenings, Light and Darkness in Paris' in Nov. featured a French film set in Paris, where Moriguchi studied, while 'The Development of Chinese Cinema: Stories of Women' in Feb. featured three films with female protagonists from 'Tracing the Chinese Cinema: from the Silent Era to the Fifth Generation', a screening project of the NFAJ.



6月 ポーランドの映画ポスター展関連特集
ポーランドで愛された映画たち チラシ(表)



8月 京(みやこ)のくらし——二十四節気を愉しむ
関連上映 相米慎二監督特集 チラシ(表)

会 期

2020年6月27日(土)～28日(日)、
8月29日(土)～30日(日)、
11月28日(土)～29日(日)、
2021年2月26日(金)～28日(日)

会 場

京都国立近代美術館 1階講堂

主 催

京都国立近代美術館(MoMAK)、
国立映画アーカイブ(NFAJ)、
中国電影資料館 ※2月の回のみ

出品点数

11作品上映
(うち、収蔵作品9点、中国電影資料館所蔵2点)

開催日数

9日

入館者数

234人

新聞・雑誌等における掲載記事

MoMAK Films 番外編 ピクチャレスク・ジャパン —世界が見た明治の日本—

国立映画アーカイブで10月24日～25日に開催した「ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント ピクチャレスク・ジャパン—世界が見た明治の日本—」の巡回上映であり、京都国立近代美術館と国立映画アーカイブの共催定期上映会「MoMAK Films」の番外編として、英国映画協会(BFI)所蔵コレクションから、明治期に外国人が日本を撮影して海外に伝えた映画をデジタル修復版で紹介。明治の日本の風景や文化が映画で世界にどのように表現されてきたのか、現在では失われた風景や文化、人々の営みを、映画上映と専門家の解説を通して探る企画であり、京都、大阪、滋賀で撮影された映像も多いことから、オンライン予約開始早々に満席(先着30席)となる好評を博した。

コロナ対策のため、講演会開催は断念し、国立映画アーカイブで10月24日(土)に開催した本イベントでの講演を撮影したビデオをもとにDCPを作成して、第一部の映画上映後に、第二部としてその講演ビデオを上映する構成とした。

講演ビデオの上映は以下の通り。

令和3年2月20日(土)、21日(日) 3:15～4:20

○「ピクチャレスク・ジャパン—映画を通した外からのまなざし—」

講演者: 小松弘(早稲田大学文学学術院教授)

○「日本の祭 横浜開港五十年祭」について

講演者: 平野正裕(元横浜開港資料館・横浜市史資料室員)

○「日本のアイヌ」の映像について

講演者: 森岡健治(平取町立二風谷アイヌ文化博物館長)

○「1914年日本の軽業師たち —ヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像—」

講演者: 大島幹雄(サーカス学会会長)

MoMAK Films Special Program, Picturesque Japan: Japanese Landscape as Seen by the World

Commemorating UNESCO's 'World Day for Audiovisual Heritage', NFAJ held 'Picturesque Japan: Japanese Landscape as Seen by the World' on Oct. 24-25. For a circulation of the same event, as an extra program of 'MoMAK Films', a regular screening program co-hosted by the National Museum of Modern Art, Kyoto, this program introduced digitally restored films from the British Film Institute (BFI) collection that were shot in Japan by foreigners during the Meiji era and transmitted overseas. Through film screenings and commentary by experts, this program explores how the landscape and culture of Meiji era Japan were expressed to the world through film, and how the landscape, culture and people's everyday lives have been lost to the present. As many of them were shot in Kyoto, Osaka, and Shiga, the event was well received and filled to capacity (30 seats) as soon as online reservations started.

MoMAK Films Special Program
Picturesque Japan
Japanese Landscape as Seen by the World

MoMAK Films 番外編
ピクチャレスク・ジャパン—世界が見た明治の日本—
京都国立近代美術館と国立映画アーカイブの共催定期上映会「MoMAK Films」の番外編として、英国映画協会(BFI)所蔵コレクションから、明治期に外国人が日本を撮影して海外に伝えた映画をデジタル修復版で紹介。明治の日本の風景や文化が映画で世界にどのように表現されてきたのか、現在では失われた風景や文化、人々の営みを、映画上映と専門家の解説を通して探る企画であり、京都、大阪、滋賀で撮影された映像も多いことから、オンライン予約開始早々に満席(先着30席)となる好評を博した。

2021年2月20日(土)～21日(日) 2:00 pm～4:20 pm
会場: 京都国立近代美術館 1階講堂
料金: 全日500円(オンライン予約優先席500円、一般席300円、学生・高齢者・障害者200円、中学生以下100円、中学生以下100円、中学生以下100円)
先着: 30席
主催: 京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ
共催: 国立近代美術館、国立映画アーカイブ
後援: 京都府、京都市、京都市教育委員会、京都市文化振興会、京都市観光協会、京都市観光協会、京都市観光協会

MoMAK

MoMAK Films 番外編 ピクチャレスク・ジャパン—世界が見た明治の日本— チラシ(表)

会 期
2021年2月20日～21日
会 場
京都国立近代美術館 1階講堂
主 催
京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会
特別協力
英国映画協会(British Film Institute)
出品点数
13作品上映(すべて英国映画協会所蔵作品)
開催日数
2日
入館者数
60人
新聞・雑誌等における掲載記事

第19回 中之島映像劇場「野田真吉の暁」

「中之島映像劇場」は、国立国際美術館が2010年度より年2回開催している上映会であり、そのうちの1回は、当館との共催で所蔵フィルムを中心にした上映会としている。

本年度は、昨年度の3月14日～15日に開催を予定していたが新型コロナウイルス感染症予防対策による臨時休館のため延期となった『野田真吉の暁』を10月に開催した。

国立国際美術館の客員研究員による企画解説を行った。

- 10月2日(金) 13:00～ Aプログラム
- 10月3日(土) 11:00～ Cプログラム
- 10月4日(日) 12:00～ Fプログラム

Nakanoshima Screen 19: Shinkichi Noda Retrospective

‘Nakanoshima Screen’ is a biannual film and video program organized by the National Museum of Art, Osaka since 2010, and is co-sponsored by us once a year, focusing on films from our collection. This fiscal year, “Shinkichi Noda Retrospective” was held in Oct. It was originally scheduled to be held on March 14-15 in the previous fiscal year but had to be postponed due to the temporary closure of the museum for the prevention of the new coronavirus infection.

会 期
2020年10月2日(金)～4日(日)
会 場
国立国際美術館 地下1階講堂
主 催
国立国際美術館、国立映画アーカイブ
協 賛
ダイキン工業現代美術振興財団
協 力
滋賀県立近代美術館
出品点数
19作品上映(内、収蔵作品8本)
開催日数
3日
入館者数
221人
新聞・雑誌等における掲載記事



第19回 中之島映像劇場「野田真吉の暁」
チラシ(表)

東京国際フォーラム+国立映画アーカイブ 月曜シネサロン&トーク

2016年度から開催している「月曜シネサロン&トーク」は、当館所蔵の文化記録映画を講師の解説付きで上映する教育・普及企画である。本年度のテーマは、昨年度の「東京と鉄道」に続き「鉄道の時代」とし、監修・解説も、鉄道総合技術研究所の小野田滋氏に依頼した。全4回の構成は、昨年度3月の開催予定がコロナ禍で延期となった「地下鉄の開発」を、第1回として10月に行い、12月は「鉄道を掘る」をテーマに開催。新型コロナウイルス感染症対策として座席利用率50%以下でも100人以上収容可能な会場で行った。第3、4回の「雪と闘う」(オンライン配信のみに変更)と「暮らしを守る／輸送の力」は、コロナ禍で延期となった。

令和2年10月12日(月)、12月7日(月)、令和3年1月18日(月)の各回、上映作品の解説トークを行った。

解説：小野田 滋(鉄道総合技術研究所所属・工学博士・土木学会フェロー)

Tokyo International Forum + NFAJ : Monday Cine-salon & Talk

'Monday Cine-salon & Talk', which has been held since 2016, is an educational and promotional program in which cultural documentary films from our collection are screened with commentary by lecturers. For fiscal year 2020, the theme was 'The Age of Railroads' following on from last year's 'Tokyo and Railways', and Shigeru Onoda from the Railway Technical Research Institute provided supervision and commentary. The structure of the four sessions was as follows. 'Subway Development' which was scheduled to be held in March last year but had to be postponed due to the corona disaster, was held in Oct. as the first session, and 'Digging for Railways' was held in Dec. As a countermeasure against the new coronavirus infection, it was held at a venue that could accommodate more than 100 people even if the seat utilization rate was less than 50%. The third and fourth sessions, 'Fight against Snow' (became online streaming only) and 'Protecting Lives / Power of Transportation' were postponed due to the corona disaster.



月曜シネサロン&トーク 10月 チラシ



月曜シネサロン&トーク 12月 チラシ

会 期
2020年10月12日(月)、12月7日(月)、 2021年1月18日(月) [オンライン配信のみに変更] ※3月8日(月)は新型コロナウイルス感染症予防対策により延期。
会 場
東京国際フォーラム
主 催
東京国際フォーラム、国立映画アーカイブ
出品点数
10作品上映(内、収蔵作品9本)
開催日数
3日
入館者数
324人 ※2回分。オンライン配信は含まない。
新聞・雑誌等における掲載記事

Fシネマ・プロジェクト こども映画館 スクリーンで見る日本アニメーション！

2017年度から一般社団法人コミュニティシネマセンターとの共催で実施している巡回上映「Fシネマ・プロジェクト こども映画館『スクリーンでみる日本アニメーション！』」である。4年目の本年度は、コロナ禍による中止もあったが、富山、宇和島など初めての開催地(複数)や、地域の中核的な子育て世代支援施設(単数)で開催されるなど、あらたなアウトリーチの成果をあげることができた。

「宇和島市学習交流センター パフィオウわじま」会場では、上映を3回行い、そのうち2回目の回では上映終了後に以下のワークショップを開催した。

①10:00～11:15

②13:00～14:15 ＊フィルム体験ワークショップあり

③15:15～16:30

14:15～フィルム体験ワークショップ(会場:1F多目的室)

・パラパラアニメをつくろう

・原始的なしくみで上映してみよう

・本物のフィルムにさわってみよう

主催：ツインクル・プラン、一般社団法人コミュニティシネマセンター、
国立映画アーカイブ

F Cinema Project : Kids' Cinema : Japanese Animation on Screen!

‘F Cinema Project: Kids' Cinema “Japanese Animation on Screen!” is a film circulation event co-hosted with Japan Community Cinema Center (JCCC), started in fiscal year 2017. As the fourth installment, although there were some cancellations due to the corona disaster, we were able to achieve new results in outreach, such as holding the program in Toyama and Uwajima, where it was held for the first time, and at a core facility to support the child-rearing generation in the region.



こども映画館@宇和島市学習交流センター
パフィオウわじま チラシ

会 期
①2020年8月8日～9日、 ②2021年2月7日
会 場
①ほとり座(富山市)、 ②宇和島市学習交流センター パフィオウわじま
主 催
一般社団法人コミュニティシネマセンター、 国立映画アーカイブ、他(各会場等)
出品点数
22作品(内、収蔵作品16本)
開催日数
3日
入館者数
218人
新聞・雑誌等における掲載記事

中国映画の展開

「中国映画の展開～三十年代から第五世代まで～」（福岡会場）

「中国映画の展開——女性たちの物語」（京都会場「MoMAK Films 2020」の枠で実施）

2021年1～2月に国立映画アーカイブで開催した上映会で上映した作品のうち、1930年代から90年代までの作品をすべて日本語字幕付（福岡会場16点、京都会場3点）で巡回上映を行った。京都国立近代美術館では、「MoMAK Films 2020」の枠で上映した。東京と同様、福岡も緊急事態宣言下での上映となったが、過去の巡回上映と同程度の入場者数となる盛況となった。

Tracing the Chinese Cinema

Among the Chinese films screened at the NFAJ in Jan. and Feb. 2021, all films from the 1930s to the 1990s were also circulated with Japanese subtitles (16 at Fukuoka and three at Kyoto). At the National Museum of Modern Art, Kyoto (MoMAK), films were screened as part of 'MoMAK Films 2020' series. Although, as in Tokyo, screenings in Fukuoka were held under a state of emergency, they were a great success with the same audience numbers as past circulated screenings.



福岡市総合図書館
映像ホール・シネラ チラシ



京都国立近代美術館 チラシ

会 期
2021年2月3日～3月7日
会 場
福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ
主 催
国立映画アーカイブ、中国電影資料館、 福岡市総合図書館
出品点数
16点(うち、所蔵作品1点)
開催日数
26日
入館者数
1,539人
会 期
2021年2月26日～28日
会 場
京都国立近代美術館
主 催
京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、 中国電影資料館
出品点数
3点(うち、所蔵作品1点)
開催日数
3日
入館者数
79人
新聞・雑誌等における掲載記事

公開70周年記念 映画『羅生門』展

ヴェネチア国際映画祭での金獅子賞受賞などにより黒澤明の名を世界に知らしめた、日本映画史上の傑作『羅生門』が劇場公開から70年、監督生誕110年となる。それを記念し、作品の魅力を様々な視点から紹介した展覧会の、当館での開催に続く巡回展として、共催者である京都府京都文化博物館にて開催されたものである。

Rashomon at the 70th Anniversary

Commemorating the 70th year since the master Japanese film “Rashomon” was released in theaters, which made the name Akira Kurosawa known to the world by the winning of the Golden Lion at the Venice International Film Festival, and the 110th year since Kurosawa was born, NFAJ had a special exhibition. This was the circulation of the same exhibition at the Museum of Kyoto, which was co-host of the project.

会 期
令和3年2月6日(土)～3月14日(日)
会 場
京都府京都文化博物館
主 催
京都府、京都府京都文化博物館、 国立映画アーカイブ、映像産業振興機構
協 力
文化庁、株式会社KADOKAWA、 株式会社アイ・ティー・ワン
出品点数
102点
開催日数
32日
入館者数
11,794人 ※ただし複数の展示を行っている総合展示室 全体の数
新聞・雑誌等における掲載記事

日本・ポーランド国交樹立100周年記念 ポーランドの映画ポスター

第二次世界大戦の終結以来、 Kommunizmusの道を歩むこととなったポーランドにおいて、1950年代の中期から社会主義リアリズムを脱却し、新世代のアーティストによる自由な表現がもっとも推し進められたのが、映画とグラフィック・デザインの分野である。

なかでも映画ポスターにおいては、数多くの抜きん出たデザイナーたちが活躍し、映画から受けたインスピレーションを、隠喩に満ちた自在な表現へと実らせていった。本展は、そうしたポスターアートの数々を紹介する展覧会の、当館での開催(2019年度)に続く巡回展として、共催者である京都国立近代美術館にて開催されたものである。

Polish Posters for Films 100th Anniversary of Poland-Japan Diplomatic Relations

In the years following World War II, Poland was firmly on the path of communism. However, the two fields of film and graphic design made a break from socialist realism in the mid-1950s and, led by a new generation of artists, reached a peak of free expression in Polish art.

Especially, preeminent designers made their mark in film poster art by rendering inspirations they received from cinema into works of free expression brimming with metaphor. This exhibition was to introduce many of those posters, and circulated to the National Museum of Modern Art, Kyoto, the co-host, after the same exhibition at NFAJ (in fiscal year 2019).

会 期
(前期)令和2年5月26日(火)～6月14日(日)、 (後期)令和2年6月16日(土)～7月12日(金)
会 場
京都国立近代美術館
主 催
京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ
後 援
駐日ポーランド共和国大使館、 ポーランド広報文化センター
出品点数
96点
開催日数
42日
入館者数
11,582人
新聞・雑誌等における掲載記事

会 場 73会場
出品点数 100本25プログラム(1プログラム4本)
会 期 2020年7月13日～2021年3月7日
開催日数 153日
入館者数 15,783人
主 催 国立映画アーカイブ
特別協力 文化庁、(社)日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会

本事業は、国民の映画文化や映画芸術への関心を高め、映画保存の重要性について理解を促すことを目的に、全国各地の教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して開催している35mmフィルムによる日本映画の巡回上映事業である。文化庁が従来の共催から特別協力となった本年度は、昨年度末から続くコロナ禍の最中、初めて100か所以下となる94会場の開催予定でスタートしたが、度重なるコロナ禍により中止が重なり、73会場での開催となった。各会場では、十分な新型コロナウイルス感染症拡大防止策をとり、座席数も50%以下にするなどの開催となった。

This is a program in liaison and cooperation with various boards of education and public cultural institutions in Japan, to circulate screening events of 35mm Japanese films to increase the public awareness of film culture and film art, and to promote understanding of the importance of film preservation. This fiscal year, the Agency for Cultural Affairs became a special collaborator instead of a co-organizer. During the corona disaster that has been continuing since the end of last fiscal year, 94 venues were expected at the beginning, less than 100 for the first time, however, due to a series of cancellations, eventually 73 venues held screenings. Each venue took adequate measures to prevent the spread of infection, and the number of seats was reduced to 50% or less.

令和2年度優秀映画鑑賞推進事業プログラム

Aプログラム

浪華悲歌(1936年・溝口健二・72分)
西鶴一代女(1952年・溝口健二・136分)
雨月物語(1953年・溝口健二・97分)
山椒大夫(1954年・溝口健二・124分)

Bプログラム

めし(1951年・成瀬巳喜男・97分)
おかあさん(1952年・成瀬巳喜男・98分)
流れる(1956年・成瀬巳喜男・116分)
乱れ雲(1967年・成瀬巳喜男・108分)

Cプログラム

青い山脈／続青い山脈(1949年・今井正・172分)
また逢う日まで(1950年・今井正・110分)
真昼の暗黒(1956年・今井正・124分)
純愛物語(1957年・今井正・130分)

Dプログラム

わが青春に悔なし(1946年・黒澤明・110分)
酔いどれ天使(1948年・黒澤明・98分)
羅生門＜デジタル復元版＞(1950年・黒澤明・88分)
天国と地獄(1963年・黒澤明・143分)

Eプログラム

カルメン故郷に帰る(1951年・木下恵介・86分)
二十四の瞳(1954年・木下恵介・155分)
野菊の如き君なりき(1955年・木下恵介・92分)
喜びも悲しみも幾歳月(1957年・木下恵介・160分)

Fプログラム

野火(1959年・市川崑・104分)
ぼんち(1960年・市川崑・104分)
東京オリンピック(1965年・市川崑・169分)
おはん(1984年・市川崑・112分)

Gプログラム

けんかえれじい(1966年・鈴木清順・86分)
東京流れ者(1966年・鈴木清順・82分)
独立愚連隊(1959年・岡本喜八・108分)
日本のいちばん長い日(1967年・岡本喜八・157分)

Hプログラム

情炎(1967年・吉田喜重・97分)
少年(1969年・大島渚・97分)
心中天網島(1969年・篠田正浩・103分)
復讐するは我にあり(1979年・今村昌平・140分)

Iプログラム

遠雷(1981年・根岸吉太郎・135分)
ロックよ、静かに流れよ(1988年・長崎俊一・100分)
櫻の園(1990年・中原俊・94分)
お引越し(1993年・相米慎二・124分)

Jプログラム

稲妻(1952年・成瀬巳喜男・87分)
にごりえ(1953年・今井正・130分)
伊豆の踊子(1963年・西河克己・87分)
華岡青洲の妻(1967年・増村保造・99分)

Kプログラム

夜の河(1956年・吉村公三郎・104分)
雪国(1957年・豊田四郎・133分)
五番町夕霧楼(1963年・田坂具隆・137分)
五瓣の椿(1964年・野村芳太郎・163分)

Lプログラム

伊豆の踊子(1974年・西河克己・82分)
Wの悲劇(1984年・澤井信一郎・109分)
時をかける少女(1983年・大林宣彦・104分)
ぼくらの七日間戦争(1988年・菅原比呂志・94分)

Mプログラム

暁の脱走(1950年・谷口千吉・110分)
嵐を呼ぶ男(1957年・井上梅次・100分)
隠し砦の三悪人(1958年・黒澤明・138分)
座頭市物語(1962年・三隅研次・96分)

Nプログラム

弁天小僧(1958年・伊藤大輔・86分)
眠狂四郎殺法帖(1963年・田中徳三・81分)
反逆児(1961年・伊藤大輔・110分)
沓掛時次郎 遊侠一匹(1966年・加藤泰・90分)

Oプログラム

不知火検校(1960年・森一生・91分)
次郎長三国志(1963年・マキノ雅弘・102分)
網走番外地(1965年・石井輝男・91分)
人生劇場 飛車角と吉良常(1968年・内田吐夢・109分)

Pプログラム

戦争と平和(1947年・山本薩夫・亀井文夫・100分)
安城家の舞踏会(1947年・吉村公三郎・89分)
蜂の巣の子供たち(1948年・清水宏・84分)
帰郷(1950年・大庭秀雄・104分)

Qプログラム

煙突の見える場所(1953年・五所平之助・108分)
 この広い空のどこかに(1954年・小林正樹・109分)
 名もなく貧しく美しく(1961年・松山善三・129分)
 裸の島(1960年・新藤兼人・96分)

Rプログラム

大江戸五人男(1951年・伊藤大輔・132分)
 銭形平次捕物控 からくり屋敷(1953年・森一生・86分)
 旗本退屈男(1958年・松田定次・108分)
 赤穂浪士(1961年・松田定次・151分)

Sプログラム

本日休診(1952年・渋谷実・97分)
 幕末太陽伝(1957年・川島雄三・110分)
 貸間あり(1959年・川島雄三・112分)
 喜劇 女は男のふるさとヨ(1971年・森崎東・90分)

Tプログラム

おかしな奴(1963年・沢島忠・110分)
 喜劇 急行列車(1967年・瀬川昌治・90分)
 吹けば飛ぶよな男だが(1968年・山田洋次・91分)
 あゝ軍歌(1970年・前田陽一・89分)

Uプログラム

エノケンの頑張り戦術(1939年・中川信夫・74分)
 大当り三色娘(1957年・杉江敏男・94分)
 ニッポン無責任時代(1962年・古澤憲吾・86分)
 君も出世ができる(1964年・須川栄三・100分)

Vプログラム

めぐりあい(1968年・恩地日出夫・91分)
 八月の濡れた砂(1971年・藤田敏八・91分)
 約束(1972年・斎藤耕一・88分)
 忍ぶ川(1972年・熊井啓・120分)

Wプログラム

張込み(1958年・野村芳太郎・116分)
 悪い奴ほどよく眠る(1960年・黒澤明・151分)
 黒い画集 あるサラリーマンの証言(1960年・堀川弘通・95分)
 白い巨塔(1966年・山本薩夫・150分)

Xプログラム

あすなろ物語(1955年・堀川弘通・108分)
 次郎物語(1987年・森川時久・110分)
 風の又三郎 ガラスのマント(1989年・伊藤俊也・107分)
 少年時代(1990年・篠田正浩・117分)

Yプログラム

西遊記(1960年・藪下泰司、手塚治虫・88分)
 太陽の王子 ホルスの大冒険(1968年・高畑勲・82分)
 長靴をはいた猫(1969年・矢吹公郎・80分)
 銀河鉄道の夜(1985年・杉井ギサブロー・107分)

令和2年度優秀映画鑑賞推進事業実施報告

会場名	開催期間	プログラム	日数	上映回数	入場者数	映画館数	人口規模
■北海道							
1 砂川市地域交流センター ゆう	9月15日(火)～9月16日(水)	D	2	4	34	0	16,490
■岩手県							
2 久慈市文化会館 アンバーホール	2月27日(土)～2月28日(日)	D	2	4	116	0	34,094
■宮城県							
3 加美町中新田文化会館 中新田パッハホール	9月27日(日)	U	1	3	225	0	22,956
■秋田県							
4 能代市文化会館	11月13日(金)	W	1	4	170	1	51,894
5 北秋田市文化会館 ファルコン	9月12日(土)～9月13日(日)	X	2	4	129	0	30,925
6 大仙市中仙市民会館 ドンパル	1月23日(土)～1月24日(日)	V	2	4	210	1	79,233
7 ほくしか鹿鳴ホール 大館市民文化会館	2月22日(月)～2月23日(火)	X	2	8	488	1	70,980
8 にかほ市仁賀保勤労青少年ホーム	12月12日(土)～12月13日(日)	L	2	4	50	0	23,841
■山形県							
9 新庄市民プラザ●	9月13日(日)	R	—	中止	—	0	34,937
10 酒田市平田農村コミュニティカレッジ拠点施設 ひらたタウンセンター●	11月26日(木)～11月29日(日)	V	—	中止	—	0	99,537
■福島県							
11 福島県文化センター(とうほう・みんなの文化センター)	8月31日(月)	J	1	2	140	2	284,899
12 会津若松市文化センター●	12月4日(金)～12月6日(日)	U	—	中止	—	0	118,159
■茨城県							
13 水戸芸術館 ACM劇場●	10月7日(水)～10月11日(日)	Y	—	中止	—	2	269,231
14 クラフトシビックホール土浦(土浦市民会館)	10月3日(土)	M	1	2	253	2	137,898
■栃木県							
15 鹿沼市民文化センター●	2月14日(日)	P	—	中止	—	0	94,660
■群馬県							
16 ベイシア文化ホール 群馬県民会館	9月16日(水)～9月17日(木)	M	2	4	153	2	334,988
17 高崎電気館	1月29日(金)～2月2日(火)	W	5	15	297	5	371,585
18 桐生市市民文化会館 シルクホール	11月1日(日)～11月3日(火)	F	2	4	462	0	107,601
19 群馬県立自然史博物館附帯ホール 富岡市かぶら文化ホール	1月17日(日)	B	1	4	372	0	47,756
20 甘楽町文化会館	11月28日(土)	W	1	4	384	0	13,600
■埼玉県							
21 深谷シネマ	9月20日(日)～9月24日(木)	G	5	10	188	1	142,556
22 SKIPシティ 彩の国ビジュアルプラザ 映像ホール	10月24日(土)～10月25日(日)	Y	2	4	112	1	607,373
■千葉県							
23 茂原市東部台文化会館●	11月13日(金)～11月14日(土)	U	—	中止	—	0	88,280
24 山武市成東文化会館 のぎくプラザ	11月15日(日)	E	1	4	112	0	51,000
25 君津市民文化ホール 中ホール●	1月20日(水)～1月23日(土)	U	—	中止	—	0	82,748
■東京都							
26 多摩市立永山公民館(ベルブ永山)	11月25日(水)～11月26日(木)	S	2	4	141	1	148,479
27 調布市文化会館たづくり くすのきホール●★	2月23日(火)～2月24日(水)	L	—	中止	—	0	237,815
28 文京シビックホール 小ホール(響きの森文京公会堂)	12月1日(火)	D	1	3	360	0	226,653
29 江東区古石場文化センター	12月12日(土)～12月13日(日)	D	2	2	131	2	526,301
■神奈川県							
30 座間市立市民文化会館(ハーモニー小ホール座間)	11月18日(水)～11月19日(木)	F	2	4	214	1	130,716
31 鎌倉市川喜多映画記念館	9月2日(水)～9月6日(日)	F	5	10	261	1	172,938
32 国立映画アーカイブ相模原分館●	11月10日(火)～11月11日(水)	P	—	中止	—	1	722,527
33 相模原市立勤労者総合福祉センター (サン・エールさがみはら)●	9月29日(火)～9月30日(水)	Q	—	中止	—	1	722,527
34 相模原南市民ホール●	10月29日(木) 10月30日(金)	L	—	中止	—	1	722,527
■山梨県							
35 都の杜うぐいすホール(うぐいすホール)	8月22日(土)～8月23日(日)	Q	2	4	46	0	29,858
36 はくばく文化ホール(富士川町ますほ文化ホール)	1月23日(土)～1月24日(日)	I	2	4	76	0	14,588
■長野県							
37 木曽文化公園文化ホール	2月13日(土)～2月14日(日)	W	2	4	176	0	11,127

会場名	開催期間	プログラム	日数	上映回数	入場者数	映画館数	人口規模
■新潟県							
38 胎内市産業文化会館	3月5日(金)～3月6日(土)	W	2	6	264	0	28,367
39 魚沼市小出郷文化会館	9月8日(火)～9月11日(金)	S	4	8	152	0	34,904
40 南魚沼市民会館 多目的ホール	9月26日(土)～9月27日(日)	O	2	6	261	0	54,998
41 高田世界館	12月3日(木)～12月6日(日)	Q	4	8	144	2	188,382
■石川県							
42 金沢21世紀美術館 シアター 21	11月21日(土)～11月22日(日)	M	2	4	181	5	462,690
43 石川県こまつ芸術劇場 うらら	2月6日(土)～2月7日(日)	Y	2	4	36	1	108,620
■福井県							
44 越前市いまだて芸術館	10月15日(木)	R	1	4	226	0	82,395
■岐阜県							
45 日本まん真ん中センター●	2月4日(木)～2月8日(月)	S	—	中止	—	0	40,194
46 羽島市映画資料館	11月21日(土)～11月22日(日)	D	2	4	64	0	67,555
47 可児市文化創造センター(ala)	2月21日(日)～2月22日(月)	V	2	4	145	0	101,416
■静岡県							
48 下田市民文化会館(まいまいホール)	2月20日(土)～2月21日(日)	F	2	4	163	0	21,080
49 御前崎市民会館	3月6日(土)～3月7日(日)	M	2	4	211	0	31,693
■愛知県							
50 犬山市南部公民館	2月20日(土)～2月21日(日)	S	2	4	124	0	73,268
■三重県							
51 亀山市文化会館	1月26日(火)	B	1	3	251	0	49,530
52 伊勢市生涯学習センター いせトピア●	9月28日(月)～9月29日(火)	D	—	中止	—	1	123,853
■滋賀県							
53 木之本スティックホール	3月6日(土)	L	1	3	198	0	116,444
■京都府							
54 久御山町ふれあい交流館 ゆうホール	12月12日(土)～12月13日(日)	M	2	4	52	1	15,800
55 京都府丹後文化会館	9月4日(金)～9月5日(土)	V	2	7	190	0	53,303
■大阪府							
56 シネ・ヌーヴォ	9月5日(土)～9月9日(水)	T	5	15	574	17	2,753,819
■兵庫県							
57 川西市みつなかホール	12月17日(木)～12月18日(金)	X	2	4	470	0	156,204
58 福崎町エルデホール	10月25日(日)	C	1	3	259	0	19,205
59 姫路市文化センター 大ホール	12月17日(木)～12月18日(金)	W	2	4	852	1	526,754
60 西脇市立音楽ホール(アピカホール)★	1月11日(月)～1月14日(木)	E	3	5	98	0	39,684
■奈良県							
61 DMG MORI やまと郡山城ホール	8月6日(木)	J	1	2	107	1	85,321
62 南コミュニティセンターせせらぎ(せせらぎホール)★	10月3日(土)～10月4日(日)	K	2	4	544	0	119,493
■和歌山県							
63 和歌山県民文化会館大ホール けんぶん	10月30日(金)	K	1	3	762	2	352,392
■島根県							
64 島根県芸術文化センター グラントワ	10月21日(水)～10月22日(木)	U	2	4	90	0	45,635
65 松江市美保関海の学苑ふるさと創生館 メテオプラザ	10月17日(土)～10月18日(日)	W	2	4	212	1	200,772
66 江津市総合市民センター ミルキーウェイホール	2月6日(土)～2月7日(日)	I	2	4	143	0	22,837
67 悠邑ふるさと会館	11月21日(土)	L	1	4	15	0	3,225
■岡山県							
68 新見文化交流館 大ホール まなび広場にいみ	9月5日(土)～9月6日(日)	N	2	4	129	0	28,363
69 岡山県天神山文化プラザ(天プラ)	2月20日(土)	U	1	3	125	5	311,914
70 倉敷市玉島市民交流センター	1月17日(日)	D	1	4	80	1	480,974
■広島県							
71 マエダハウジング安佐南区民文化センター●	1月22日(金)	C	—	中止	—	7	244,301
72 はつかいち文化ホール ウッドワンさくらびあ	11月18日(水)～11月19日(木)	B	2	8	403	0	116,866
73 福山駅前シネマモード	9月19日(土)～9月22日(火)	W	4	4	95	3	465,402
■山口県							
74 下関市民化会館 大ホール	9月22日(火)～9月23日(水)	B	2	6	423	1	257,553

会場名	開催期間	プログラム	日数	上映回数	入場者数	映画館数	人口規模
75 山口情報芸術センター(YCAM)	1月8日(金)～1月11日(月)	K	4	8	142	1	190,663
76 山口県民芸術文化ホールながと(ルネッサながと)	8月15日(土)～8月16日(日)	A	2	6	116	0	32,819
77 岩国市周東文化会館(パストラルホール)●	9月26日(土)	J	—	中止	—	0	132,100
■香川県							
78 善通寺市民会館●	2月21日(日)	G	—	中止	—	0	31,269
79 香川県県民ホール(レグザムホール)●	10月24日(土)	B	—	中止	—	2	427,131
■徳島県							
80 小松島市ミリカホール	9月4日(金)～9月5日(土)	K	2	4	53	0	36,670
■愛媛県							
81 宇和島市生涯学習センター	10月17日(土)	L	1	4	142	0	72,374
82 松山市総合福祉センター●	10月30日(金)～11月1日(日)	D	—	中止	—	3	507,085
■高知県							
83 土佐清水市立市民文化会館(くろしおホール)	8月22日(土)～8月23日(日)	W	2	4	117	0	12,271
84 高知あたら劇場●	8月22日(土)～8月26日(水)	D	—	中止	—	2	323,544
■福岡県							
85 小都市文化会館	1月16日(土)～1月17日(日)	X	2	4	253	0	59,585
■佐賀県							
86 鹿島市生涯学習センター(エイブル)	2月27日(土)～2月28日(日)	U	2	6	219	0	28,396
87 武雄市文化会館	1月29日(金)～1月30日(土)	K	2	8	440	0	48,390
■長崎県							
88 川棚町公会堂●	2月13日(土)～2月14日(日)	E	—	中止	—	0	13,776
■熊本県							
89 八千代座	1月31日(日)	R	1	4	73	0	51,324
90 本渡第一映劇	10月30日(金)～11月3日(火)	M	5	19	252	1	78,127
91 ながす未来館	9月5日(土)～9月6日(日)	M	2	4	60	0	15,328
■大分県							
92 日田市民文化会館(パトリア日田)	8月29日(土)～8月30日(日)	Y	2	6	138	1	63,434
■宮崎県							
93 門川町総合文化会館●	9月19日(土)～9月20日(日)	L	—	中止	—	0	17,273
■沖縄県							
94 桜坂劇場	10月17日(土)～10月20日(火)	J	4	12	435	3	319,012
集計			94会場	153	374	15,783	

★印は本年度新規実施会場(3会場)

●印は本年度中止会場(21会場)

(1)映画フィルム

コロナ禍の影響により、海外への映画フィルム等の貸与件数は例年に比べて大幅に低下したが、北欧(フィンランド国立視聴覚協会、ノルウェー映画協会、デンマーク映画協会)で開催された松竹映画 100年を記念した上映会や、第34 回チネマ・リトロバート映画祭、フォルッサ無声映画祭等の映画祭に当館所蔵作品を提供することができた。また、東アジア諸国(台湾映画祭、韓国シネマテーク協会、韓国映像資料院、香港映画批評家協会)やオーストラリア(オーストラリアン・シネマテーク)に対しても、昨年度に引き続き所蔵作品を提供した。国内では、4 月の緊急事態宣言の発出により、中止や会期延期を余儀なくされた上映企画が続出したものの、適切な感染対策を講じたラピュタ阿佐ヶ谷、シネマヴェーラ渋谷、新文芸坐、神保町シアター、ユーロスペース、シネ・ヌーヴォ、鎌倉市川喜多映画記念館等の名画座やミニシアター、映画関連施設に対して、所蔵作品を貸与することができた。

映画フィルム等の特別映写についても申請件数の大幅な低下が見られたが、国内からは明治学院大学、京都大学、日本映画大学、早稲田大学等の研究教育機関のほか、日本映画撮影監督協会や黒澤明研究会等の団体から、また海外からは、チューリヒ大学の申請に応じることができた。

映画フィルム等の複製利用については、著作権者等によるデジタル化、テレビ番組や映像作品のためのフッテージ使用に加え、今年はコロナ禍でオンライン開催となったポルデノーネ無声映画祭やマニラ国際無声映画祭、京都市主催「京都映画賞創設祈念特別上映会」に対して、配信用の上映素材を提供した。テレビ番組では NHK「歴史秘話ヒストリア」の「小津安二郎 日常というドラマ」に対して、野田高梧撮影のホームムービーを提供。また、学研発行の学習漫画シリーズ「学研まんが New 日本の歴史」の付録 DVD、そして大学オンライン授業用ライブラリーや東京都立高等学校向け英語科授業「東京イングリッシュエンパワーメントプログラム」の配信教材に、学習・教育目的で当館所蔵作品が利用された。

映画フィルム

①貸出	
件数	42件
本数	73本
②特別映写観覧	
件数	29件
本数	115本
③複製利用	
件数	23件
本数	45本

(2)映画関連資料

映画資料の貸出については、日本でも数少ない常設の映画関連展示施設である鎌倉市川喜多映画記念館への貸出が案件の数として目立っている。資料の特別観覧については、出版社・教育機関・テレビ局などの要望に対し、資料画像の提供や研究者による熟覧などの形で所蔵資料へのアクセスに応じている。

映画関連資料

①貸出	
件数	3件
点数	55点
②特別観覧	
件数	27件
点数	603点

(1) Motion Picture Films

Because of Covid-19, the number of international loans of motion picture films etc. was significantly lower than in previous years. However, we were able to provide films in our collection to screenings held in Scandinavia (Finland National Audiovisual Institute, Norwegian Film Institute, Danish Film Institute) to commemorate the 100th anniversary of Shochiku's films, and film festivals such as the 34th Il Cinema Ritrovato and Forssa Silent Film Festival. In addition, as in the previous fiscal year, we continued to provide films from our collection to East Asian countries (The Taipei Film Festival, Korean Association of

Cinematheques, Korean Film Archive, Hong Kong Film Critics Society) and Australia (Australian Cinémathèque). In Japan, many screening projects had to be cancelled or postponed due to the declaration of a state of emergency in April, but we were able to loan films in our collection to revival houses, mini-theaters, and film-related facilities which took appropriate countermeasures against infection such as Laputa Asagaya, Cinemavera Shibuya, Shin-Bungeiza, Jinbocho Theater, Eurospace, Ciné Nouveau, and Kamakura City Kawakita Film Museum.

For requested special screenings, though there was also a significant drop in the number of applications, we were able to respond to requests from domestic research and educational institutions such as Meiji Gakuin University, Kyoto University, Japan Institute of the Moving Image, and Waseda University, as well as from organizations such as the Japanese Society of Cinematographers and the Society of Akira Kurosawa, and from overseas, from the University of Zurich.

Concerning duplication of motion picture films, adding to the digitization done by copyright holders and secondary footage use for TV programs, we provided data for streaming at Le Giornate del Cinema Muto, International Silent Film Festival Manila, Kyoto-city's 'Special Screening to Commemorate the Establishment of the Kyoto Film Awards', which were all held online due to Covid-19. As for TV programs, we provided home movies shot by Kogo Noda for NHK's 'Rekishi Hiwa Historia' - 'Yasujiro Ozu: A Drama of Everyday Life'. In addition, films in our collection were used for educational purposes in the DVD supplement of 'Manga New Japanese History' a series of educational manga published by Gakken, as well as for online university courses, and the English learning tool for Tokyo Metropolitan high school students, 'Tokyo English Empowerment Program'.

(2) Non-film Materials

The most notable loan of non-film materials was for Kamakura City Kawakita Film Museum, which is one of the few film related museums with a permanent exhibition. We provide special access to materials in the collection by showing copies of the material or allowing close inspection on request from publishing companies, educational institutions, and television stations.

令和2年度 映画フィルム貸与実績一覧

【国内】

No. 申請者	上映会名等	本数
1 株式会社ラピュタ	上映企画「酔っ払い特集」	3
2 有限会社ユーロスペース	上映企画「浪曲映画—情念の美学2020」	4
3 神保町シアター	上映企画「溝口健二監督特集」	1
4 シネ・ヌーヴォ	上映企画「没後50年 映画監督 内田吐夢」	8
5 鎌倉市川喜多映画記念館	上映企画 「生誕100年 激動の時代を生きた2人の女優—原節子と山口淑子」	2
6 公益財団法人金沢文化振興財団	上映企画「三文豪映画祭」	1
7 認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭	上映企画「山の恵みの映画たち2020」	1
8 一般社団法人昭和 cultura アーカイブス	上映企画「昭和の名優 渡哲也追悼上映会」	1
9 有限会社横浜シネマリン	上映企画「ピアノ de フィルム vol. 1」	1
10 株式会社ラピュタ	上映企画「日活映画を支えたバイプレーヤーたち」	3
11 日本大学芸術学部	上映企画「中国を知る」	1
12 株式会社ダッサイ・フィルムズ	上映企画「森崎東監督追悼特集」	1
13 株式会社ダッサイ・フィルムズ	上映企画「追悼・原知佐子」	2
14 鎌倉市川喜多映画記念館	上映企画「バレエ映画の世界 日本バレエ発祥の地・鎌倉」	1
15 一般社団法人コミュニティシネマセンター	上映企画「映画ミーツ浪曲」	1
16 株式会社ラピュタ	上映企画「実話にもとづく映画特集」	1
17 株式会社クランク	上映企画「浪曲映画祭」	1
18 株式会社ラピュタ	上映企画「豊田四郎監督特集」	5
19 株式会社ラピュタ	上映企画「伝説の美女、魅惑の独演 昭和の銀幕に輝くヒロイン [第97弾] 司葉子」	1
20 京都市	京都映画賞創設記念『最古の『忠臣蔵』特別上映会』にて上映する ため(活弁・伴奏付き)	1
21 株式会社ダッサイ・フィルムズ	上映企画「『大島渚全映画秘蔵資料集成』刊行記念特集」	1
22 株式会社マルハン 新文芸座	上映企画「市川崑 初期ライト・コメディの誘惑」	2
23 アテネ・フランセ文化事業株式会社	上映企画「映画一揆外伝～破れかぶれ～ 瀬々敬久監督特集」	2
24 マツダ映画社	上映企画「第1回新宿東口映画祭」	1
25 株式会社ラピュタ	上映企画「脚本家・桂千穂特集」	2
26 アンスティチュ・フランセ日本	上映企画 「第3回 映画批評月間：フランス映画の現在をめぐって」	1
27 株式会社マルハン 新文芸座	上映企画「一周忌追善 大林宣彦 永遠の魔法⑧」	1
28 有限会社横浜シネマリン	上映企画「ピアノ de フィルム vol. 3」	1
小計 (国内)		件数28件 計51本

【海外】

No. 申請者	上映会名等	本数
1 台北映画祭	「第22回台北映画祭」	1
2 韓国シネマテーク協会	上映企画「大林宣彦特集」	2
3 フォルツァ無声映画祭	「フォルツァ無声映画祭」	2
4 チネテカ・ディ・ボローニャ	「第34回ボローニャ復元映画祭」	1
5 フィンランド国立視聴覚協会	『燈台守』特別上映会	1
6 ユーゴスロヴェンスカ・キノテカ	「第22回ナイトレート・フィルム・フェスティバル」	1
7 香港映画批評家協会	上映企画「クリティクス・チョイス2020 未来は今」	1
8 フィンランド国立視聴覚協会	上映企画「松竹100周年」	1
9 ノルウェー映画協会	上映企画「松竹100周年」	1
10 韓国シネマテーク協会	上映企画「女性の告白 日本の大女優特集」	4

No. 申請者	上映会名等	本数
11 デンマーク映画協会	上映企画「松竹100周年」	2
12 オーストラリアン・シネマテーク	上映企画「銀幕のオートバイ」	1
13 韓国映像資料院	上映企画「日本の女性映画監督」	3
14 フィルモテカ・エスパニョーラ	『燈台守』特別上映会	1
小計（海外）		件数14件 計22本
合計（国内＋海外）		件数42件 計73本

【映画関連資料国内貸与】

展覧会名	主催者	貸与点数
激動の時代を生きた2人の女優—原節子と山口淑子	鎌倉市川喜多映画記念館	25点
バレエ映画の世界 日本バレエ発祥の地・鎌倉	鎌倉市川喜多映画記念館	18点
日本映画名優(バイプレイヤーズ)列伝	鎌倉市川喜多映画記念館	12点
小計		件数3件 計55点

【映画関連資料海外貸与】0件 0点

Ⅲ 調査研究

◆展覧会図録における執筆

展示品解説文 岡田秀則(主任研究員)公開70周年記念 映画『羅生門』展

◆館ニュースにおける執筆

「デジタル時代における無声映画の適正な速度」岡島尚志(館長)『NFAJ ニュースレター』第9号 R2.7.1

「大曾根辰夫と松竹京都撮影所」大澤浄(主任研究員)『NFAJ ニュースレター』第9号 R2.7.1

「松竹映画 100年の歩み」濱田尚孝(特定研究員)『NFAJ ニュースレター』第9号 R2.7.1

「アイリーン・パウザーの仕事」岡島尚志(館長)『NFAJ ニュースレター』第10号 R2.10.1

近森眞史氏インタビュー「フィルムの質感が伝えるもの」佐野亨(客員研究員)富田美香 大澤浄(主任研究員)玉田健太 森宗厚子(特定研究員)山本一郎(特定専門員)『NFAJ ニュースレター』第10号 R2.10.1

「コレクション研究 日本のディズニー映画ポスター(1959-1967)」岡田秀則(主任研究員)『NFAJ ニュースレター』第11号 R3.1.1

「コロナ禍と世界のフィルムアーカイブ」岡島尚志(館長)『NFAJ ニュースレター』第11号 R3.1.164

「1980年代——日本映画の再編成」大澤浄(主任研究員)玉田健太 森宗厚子(特定研究員)佐野亨(客員研究員)『NFAJ ニュースレター』第11号 R3.1.1

◆館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

A. 学会等発表

「ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像」岡田秀則(主任研究員)アンスティチュ・フランセ東京R2.7.19 アンスティチュ・フランセ東京

Prevention and Management of Natural and Human Disasters in Film Archives: Natural Disasters (Day 2 Session)岡島尚志(館長)国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF) R2.9.29 オンライン・シンポジウム

トーク ミシェル・ピコリ追悼 岡田秀則(主任研究員)ミッシェル・ピコリ追悼特集 アンスティチュ・フランセ横浜 R2.10.11 アンスティチュ・フランセ横浜

Visual Archives: Ethics and Best Practices 岡島尚志(館長) Asia-Pacific Institute for Broadcasting Development R2.10.22 オンライン・セミナー

「松竹映画100年 松竹京都の歴史」大澤浄(主任研究員)第12 回京都ヒストリカ国際映画祭 R2.10.23 ~ 11.15 (オンライン動画)

「4K8K時代の映像アーカイブ」三浦和己(主任研究員) 公益社団法人 映像文化製作者連盟 R2.10.26 オンライン(凸版印刷株式会社本所事業所)

「マキノ映画における京都の花街・舞妓表象 一万博から「祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖」(1930)へ」富田美香(主任研究員)「大正期京都のロマン主義—吉井勇・花街・国展・映画」シンポジウム R2.11.7 京都大学人文科学研究所本館4階大会議室

Multiple versions of Silent Films: Unstable concept of “Original” Saving Memory : Making Silent Films Talk to Us 大傍正規(主任研究員) R2.12.4 14th International Silent Film Festival Manila Online Webinar

「演劇博物館所蔵「大正・昭和初期映画館チラシ」のカタログングと研究活用:国立映画アーカイブの事例と比較して」佐崎順昭(客員研究員)早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点公募研究課題「映画宣伝資料を活用した無声映画興行に関する基礎研究」R2.12.23 早稲田大学早稲田キャンパス6号館2階会議室

「国立映画アーカイブにおけるコレクション形成—映画フィルムの整理と目録作成を行う意義について」大傍正規(主任研究員)映画の復元と保存に関するオンラインワークショップ2021 R3.1.23 オンライン

「映画監督田中絹代と彼女の作品: 同時代の評価より」富田美香(主任研究員)한국영상자료원 영화강좌(韓国映像資料院 映画講座) R3.2.19 オンライン

①対談「映画資料の魅力～映画宣材は如何にして生まれるか?」②シンポジウム「映画資料をめぐる現状とその課題—全国ネットワーク化に向けて」岡田秀則(主任研究員)全国映画資料アーカイブサミット2021 R3.3.2 オンライン

「基調トーク 演劇博物館所蔵「大正・昭和初期映画館チラシ」が埋める無声映画史の隙間」岡田秀則(主任研究員)早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点公募研究課題「映画宣伝資料を活用した無声映画興行に関する基礎研究」R3.3.11 オンライン

B. 雑誌等論文掲載

◆学術書籍、研究報告書等の発行

From Travel to Digitisation: Scattered Thoughts on the Virus Age and the Film Archive 岡島尚志(館長) *Journal of Film Preservation* No. 103

(International Federation of Film Archives) R2.10

「映画からテレビまで、現像を支えた東洋現像所 現像技師奥村朗、須佐見成」富田美香(主任研究員)谷川建司編『映画人が語る 日本映画史の舞台裏』(森話社、2020) R2.10

Fuji 岡田秀則(主任研究員) Physical Characteristics of Early Films as Aids to Identification, New Expanded Edition (Fédération Internationale des Archives du Film) R2.12

◆【査読無し】論文掲載

レビュー 中村秀之著『暁のアーカイヴ——戦後日本映画の歴史的経験』大澤浄(主任研究員)『映像学』第104号 R2.7.1

「甦った世界の映画 フランス」岡田秀則(主任研究員)『甦った世界の映画』(神戸映画アーカイブ実行委員会) R2.12.173

◆その他(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞、ウェブサイト等)の発表

「映画は小さかった 観客とスクリーンのあいだ」岡田秀則(主任研究員)「てんとう虫／express」(UCカード) R2.10.1

日本映画の重要史料探せ 初文献の完本や初公開の地の写真発見 本地陽彦(客員研究員)「日本経済新聞」R2.10.17

「NOBODY全号解説 NOBODY 第30号」玉田健太(特定研究員)『NOBODY』第48号 R2.10.31

「イーストウッドをフィルムで見よう！」玉田健太(特定研究員)『芸術新潮』第851号 R2.11.25

「《現実》と《虚構》を切り返す—アーカイバル・ドキュメンタリーの最前線」岡田秀則(主任研究員)「キネマ旬報」2020年12月上旬号(キネマ旬報社) R2.12.1

作品解説「折鶴お千」「団栗と椎の実」「鷗／海燕」佐崎順昭(客員研究員)「甦った世界の映画」(神戸映像アーカイブ実行委員会) R2.12.1

作品解説「黄金の弾丸」佐崎順昭(客員研究員)「甦った神戸の映画『黄金の弾丸』オンライン配信」(神戸映像アーカイブ実行委員会) R2.12.11

アートダイアリー 76「中国映画の熱い歴史」大澤浄(主任研究員)「文化庁広報誌 ぶんかる」(文化庁)(Web) R3.1.29

書評「活動写真弁史」岡田秀則(主任研究員)「日本経済新聞」R3.1.30

「インタビュー 檜垣紀六」岡田秀則(主任研究員)「キネマ旬報」2021年2月下旬号(キネマ旬報社) R3.2.15

作品解説「忠臣蔵」入江良郎(主任研究員)京都映画賞創設記念・二条城撮影所誕生111周年記念 活動写真弁士による「最古の『忠臣蔵』特別上映会」R3.3.21

IV 教育普及

1 普及活動 Educational Activities

1-1 資料の収集および図書室の公開 Acquisition of Non-Film Materials and the Library

図書室では、映画文献に関する一定の網羅性を目指して、映画関連の新刊書と雑誌の収集を行うとともに、未所蔵の古書や戦前の雑誌など貴重な映画文献の購入、さらに一般の書籍流通ルートには乗らない刊行物の収集にも努めている。令和2年度は書籍、雑誌など未収蔵の文献を購入したが、中でも古書店からの購入として特筆すべきは日本映画黎明期の映画会社吉沢商店の発行した「北清事変写真帖」(1901年)や、「蒲田」「エスエス」「ぼいんとファン」など戦前期の映画雑誌である。

図書所蔵情報の公開については、新型コロナウイルスの影響で登録作業日が減少し、新着図書の登録が連年に比べて滞る傾向が見られた。新着書籍のオンライン目録への登録は例年通り行うことができたが、映画雑誌の登録は進められなかった。

図書室運営についても、7月7日の再開館以降は、通常の週5日から開室日を減らして火曜から金曜までの週4日開室に、さらに1月に発された緊急事態宣言の影響で1月19日からは事前予約制を採用、週3日(火曜・木曜・土曜)の開室となった。

図書室公開活動

公開日数	124日 *うち事前予約制の採用期間中 24日
公開件数	897件(和書880件/洋書17件)
入室者数	1,642人
公開請求件数	3,190件
複写利用数	531人(7,728枚)

1-2 学校や社会教育施設への幅広い学習機会の提供 Aid for Research and Study

◆特別映写観覧による大学授業等への協力

実施回数：9回
参加人数：130人

◆特別映写観覧による大学機関に対する調査研究等への協力

実施回数：11回
参加人数：39人

◆特別映写観覧による職能教育研修会等への協力

実施回数：1回
参加人数：35人

◆特別映写観覧による各種機関(大学除く)調査研究等への協力

実施回数：1回
参加人数：20人

◆大学の授業等への協力(団体見学)

実施回数：3回
参加人数：25人

1-3 児童生徒を対象とした事業 Projects for Children and Young Students

◆「こども映画館 2020年の夏休み★」

「こども映画館」は、小・中学生を対象に平成14年度から毎年開催している恒例企画。こどもたちに、大きなスクリーンによる本物の映画(フィルム)を楽しむ機会を与え、優れた映画作品の鑑賞を通して、豊かな情操と高い映像理解力(リテラシー)を育み、映画という文化芸術遺産の素晴らしさ、楽しさを知ってもらうことを目的とし、無声映画には弁士・演奏付での上映を行っている。

実施回数：4回(7月31日(金)～8月1日(土)、8月7日(金)～8日(土))

参加者数：141人

会場：小ホール

7月31日(金) 1:30pm～3:00pm アニメーションの豊かな表現

8月1日(土) 1:30pm～3:00pm こころが育つ物語がいっぱい！

8月7日(金) 1:30pm～3:00pm 活弁と生演奏で楽しむ、摩訶不思議な映像世界

弁士：片岡一郎

演奏：湯浅ジョウイチ(作曲・編曲、ギター)・鈴木真紀子(フルート)

8月8日(土) 1:30pm～3:00pm 活弁と生演奏で楽しむ、80年以上前の東京で暮らす少年たち

弁士・演奏：片岡一郎

演奏：湯浅ジョウイチ(作曲・編曲、ギター)・鈴木真紀子(フルート)

◆「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」

毎年開催している「こども映画館」に加え、V4各国大使館および文化センターとの共催企画「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」の開催により、参加者の児童生徒および父母層に加え、上映・紹介する映画作品の層を広げることができた。

実施回数：1回(12月12日(土))

参加者数：89人

会場：小ホール

主催：国立映画アーカイブ、ポーランド広報文化センター、日ハンガリー大使館文化部ハンガリー文化センター東京、駐日スロバキア共和国大使館、チェコセンター東京

後援：駐日ポーランド共和国大使館・駐日チェコ共和国大使館

◆「こども映画館 スクリーンでみる日本アニメーション！」

一般社団法人コミュニティシネマセンターとの共催による巡回上映企画を通して、関連団体との連携を深めることができた。詳細は共催による館外上映会参照。

◆相模原市立由野台中学校(2年生)小・中学生向け映画上映

実施回数：1回(令和3年3月23日)

参加者数：144人

会場：相模原分館

1-4 講演会・シンポジウム・ギャラリートーク等 Lecture/Symposium/Post-screening Talk/Gallery Talk

1-4-1 講演会・シンポジウム Lecture/Symposium

①ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント ピクチャレスク・ジャパン——世界が見た明治の日本——

開催日時：2020年10月24日(土)～25日(日) 12:00pm～3:45pm

講演は、10月24日12:00pmの回のみ講師が登壇。その後の回は講演を撮影したビデオを上映。

開催場所：国立映画アーカイブ 長瀬記念ホール OZU

主催：国立映画アーカイブ、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会

特別協力：英国映画協会(British Film Institute)

協力：株式会社橋本ピアノ

講演：

○「ピクチャレスク・ジャパン——映画を通じた外からのまなざし——」

講演者：小松弘氏(早稲田大学文学学術院教授)

○「日本の祭 横浜開港五十年祭」について

講演者：平野正裕氏(元横浜開港資料館・横浜市史資料室員)

○「日本のアイヌ」の映像について

講演者：森岡健治氏(平取町立二風谷アイヌ文化博物館長)

○「1914年日本の軽業師たち——ヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像——」

講演者：大島幹雄氏(サーカス学会会長)

参加者数：381名

1-4-2 ゲストトーク Post-screening Talks

①松竹第一主義 松竹映画の100年

下記の回で映画監督や映画研究者等によるトークイベント(計5回)を開催した。

○7月31日(土) 7:00pmの回『ソナチネ[再タイミング版]』(監督 北野武 1933年)

登壇者：撮影監督 柳島克己氏

参加者：101名

○8月11日(火) 7:00pmの回「無声時代劇選集」上映前

登壇者：映画研究者 牧由尚氏

参加者：101名

○8月13日(木) 3:15pmの回『同胞』(監督 山田洋次 1975年)上映前

登壇者：映画監督 山田洋次氏

参加者：59名

○8月22日(火) 4:30pmの回「無声時代劇選集」上映前

登壇者：映画研究者 牧由尚氏

参加者：92名

○9月1日(火) 7:00pmの回『カルメン故郷に帰る』(監督 木下恵介 1951年)上映前

登壇者：名古屋大学 特任教授 大関勝久氏

参加者：90名

合 計：443名

②第42回びあフィルムフェスティバル

ほぼすべての回で監督やスタッフ、出演者、ゲストによるトークイベント(計23回)を開催した。

○9月12日(土) 11:00amの回

鈴木順也氏(『パンク』監督)、高階 匠氏(『霞姫霊異記』監督)

参加者：91名

○9月12日(土) 2:45pmの回

石井裕也氏(『生きちゃった』監督)、仲野太賀氏、若葉竜也氏、大島優子氏(『生きちゃった』出演者)

参加者：90名

○9月12日(土) 6:30pmの回

チェ・ユシン氏(『タヌキ計画』監督)、haiena氏(『LUGINSKY』監督)

参加者：70名

○9月13日(日) 11:00amの回

矢部 凜氏(『もともとたせい』監督)、石田智哉氏(『へんしんっ!』監督)

参加者：97名

○9月13日(日) 6:00pmの回

金井啓太氏(『追憶と槌』監督)、守田悠人氏(『頭痛が痛い』監督)

参加者：55名

○9月15日(火) 11:00amの回

遠上恵未氏(『遠上恵未(24)』監督)、寺西 涼氏(『屋根裏の巳巳己』監督)

参加者：55名

○9月15日(火) 3:00pmの回

小池 茅氏(『フィン』監督)、関 麻衣子氏(『MOTHERS』監督)

参加者：61名

○9月16日(水) 11:00amの回

千阪拓也氏(『こちら放送室よりトム少佐へ』監督)、稲田百音氏(『アスタースクールデイズ』監督)、野村陽介氏(『未亡人』監督)

参加者：67名

○9月16日(水) 3:00pmの回

河内 彰氏(『Fear of missing out』監督)、多持大輔氏(『冬のほつれまで』監督)

参加者：55名

○9月16日(水) 6：30pmの回

ピーター・バラカン氏

参加者：85名

○9月17日(木) 11：00amの回

小山泰嵩氏(『タヌキ計画』助監督)、haicna氏(『LUGINSKY』監督)

参加者：35名

○9月17日(木) 2：30amの回

矢部 凜氏(『もとめたせい』監督)、石田智哉氏(『へんしんっ！』監督)

参加者：57名

○9月18日(金) 11：00amの回

金井啓太氏(『追憶と槌』監督)、守田悠人氏(『頭痛が痛い』監督)

参加者：41名

○9月18日(金) 3：15pmの回

鈴木順也氏(『パンク』監督)、高階 匠氏(『霞姫霊異記』監督)

参加者：67名

○9月19日(土) 11：00amの回

河内 彰氏(『Fear of missing out』監督)、多持大輔氏(『冬のほつれまで』監督)

参加者：78名

○9月19日(土) 2：30pmの回

千阪拓也氏(『こちら放送室よりトム少佐へ』監督)、稲田百音氏(『アスタースクールデイズ』監督)、野村陽介氏(『未亡人』監督)

参加者：99名

○9月19日(土) 6：30pmの回

小池 茅氏(『フィン』監督)、野村陽介氏(『未亡人』監督)

参加者：96名

○9月20日(日) 12：00pmの回

犬童一心氏(『夢を与える』監督)

参加者：77名

○9月20日(日) 6：00pmの回

遠上恵未氏(『遠上恵未(24)』監督)、寺西 涼氏(『屋根裏の巳巳己』監督)

参加者：85名

○9月22日(火) 1：00pmの回

瀬々敬久氏(『悪党～加害者追跡調査～』監督)

参加者：75名

○9月24日(木) 6：30pmの回

小松 孝氏(『猫と塩、または砂糖』監督)、田村健太郎氏、宮崎美子氏、吉田凜音氏

参加者：95名

○9月26日(土) 2：00pmの回

寺西涼氏(『屋根裏の巳巳己』監督)、平松麻氏(画家)

参加者：60名

○9月26日(土) 5：30pmの回

石田智哉氏(『へんしんっ！』監督)

参加者：81名

合 計：1,672名

③1980年代日本映画——試行と新生

●上映前挨拶

○3月12日(金) 6：00pmの回『ロックよ、静かに流れよ』

ゲスト：増田久雄氏(プロデューサー、脚本家)

④「再映：戦後日本ドキュメンタリー映画再考」[川本喜八郎＋岡本忠成 アニメーション作品上映]

●監督挨拶

○2月20日(土)『沖縄 久高島のイザイホー』上映前

岡田一男監督

○2月28日(日)『ルーペ カメラマン 瀬川順一の眼』上映後

伊勢真一監督

○3月12日(金)『ルーペ カメラマン 瀬川順一の眼』上映後

伊勢真一監督

○3月19日(金)『沖縄 久高島のイザイホー』上映後

岡田一男監督

1-4-3 ギャラリートーク Gallery Talks

新型コロナウイルス感染症対策のため、開催せず。

1-5 大学等との連携 Working with Universities

◆インターンシップ

受入人数 1名

受入期間 8月5日(木)～9月20日(土)

事業内容 学芸課全4室の運営にかかわる業務の補助をすべて実地に体験するカリキュラムで実施した。

◆博物館実習

受入人数 12名

受入期間 8月25日(火)～8月29日(土)

事業内容 実習生12名を受け入れ、総務課および学芸課全4室の運営に関する講義と保存・公開に関する実習を行った。

2-1 カタログ Catalogs



- 公開70周年記念
映画『羅生門』展(商業出版)
28.0×22.5cm / 128p
発行日：2020年10月8日
監修：国立映画アーカイブ、
映像産業振興機構



- 第42回ぴあ
フィルムフェスティバル
(共催者発行)
25.7×18.2cm / 56p
発行年：2020年9月12日
責任編集：荒木啓子
編集：樺沢優希

2-2 目録・ガイド等 Catalogs and Leaflets

発行：国立映画アーカイブ
編集：国立映画アーカイブ



- 令和2年度 優秀映画鑑賞
推進事業 鑑賞の手引
29.7×21cm
(表紙A3判1回折1枚、
作品解説A4判25枚)
デザイン・制作：
株式会社オーエムシー
発行日：2020年6月30日

展覧会出品目録・ガイド(3回)



- 松竹第一主義
松竹映画の100年
22.5×10cm / 8p
発行日：
2020年7月7日



- 公開70周年記念
映画『羅生門』展
22.5×10cm / 8p
発行日：
2020年9月12日



- 川本喜八郎+
岡本忠成
パペット・アニメー
ション2020
22.5×10cm / 8p
発行日：
2020年12月19日

2-3-1 NFAJプログラム NFAJ Program

29.7×21cm

上映作品解説／上映スケジュール



□No.21

松竹第一主義 松竹映画の100年
8p (PDFのみの発行)



□No.22

生誕100年 映画俳優 三船敏郎
6p



□No.23

サイレントシネマ・デイズ2020
2p



□No.24

生誕100年 映画女優 原節子
4p



□No.25

生誕100年 映画女優 山口淑子
4p



□No.26

中国映画の展開
——サイレント期から第五世代まで
4p



□No.27

1980年代日本映画
——試行と新生
6p

29.7×21cm



□松竹第一主義
松竹映画の100年

2p



□公開70周年記念
映画『羅生門』展

2p



□川本喜八郎+岡本忠成
パペット・アニメー
ション2020

2p

(ア)国立映画アーカイブ発行 29.7×21cm



□こども映画館
2020年の夏休み★
2p

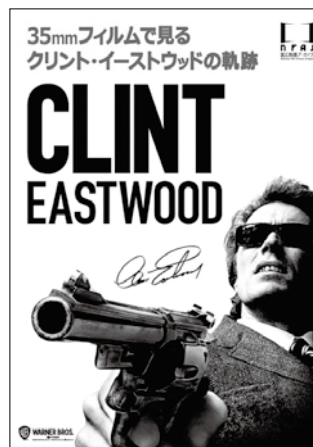


□ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」
記念特別イベント
「上映と講演」
ピクチャレスク・ジャパン
——世界が見た明治の日本——
4p

(イ)共催者発行 25.7×18.2cm



□第42回あフィルム
フェスティバル
6p



□35mmフィルムで見るクリ
ント・イーストウツの軌跡
4p



□V4中央ヨーロッパ
子ども映画祭
2p

24.7×21cm

発行・著作：独立行政法人国立映画アーカイブ

編集：国立映画アーカイブ



□9号(2020年5月-9月号)

特 集：松竹第一主義 松竹映画の100年

発行日：2020年7月1日



□10号(2020年10月-12月号)

特 集：公開70周年記念 映画『羅生門』展

生誕100年 映画俳優 三船敏郎

生誕100年 映画女優 原節子

生誕100年 映画女優 山口淑子

35mmフィルムで見るクリント・イーストウッズの軌跡

発行日：2020年10月1日



□11号(2021年1月-3月号)

特 集：中国映画の展開——サイレント期から第五世代まで

1980年代日本映画——試行と新生

川本喜八郎+岡本忠成 パペットアニメーション2020

発行日：2021年1月1日

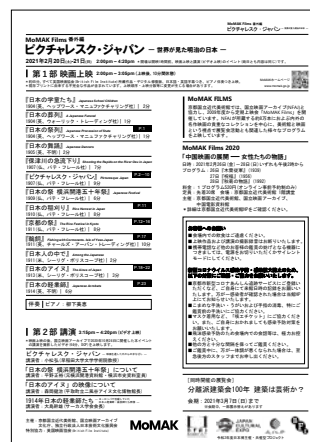


□国立映画アーカイブ 年間スケジュール 2020

22.5×10cm

12p

(ア)上映会のためのハンドアウトの発行 5号および改訂版



□『NFAJハンドアウト 第005号

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント

〔上映と講演〕ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー

(2020年10月24日発行)

(イ) web公開資料(PDF)の発行

①『ピクチャレスク・ジャパンー 世界が見た明治の日本ー 上映作品解説資料』

※『NFAJハンドアウト 第005号 ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント〔上映と講演〕ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー』および『MoMAK Films 番外編 ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー』に、WEB公開用の修正を加えたもの。

発行日：2021年3月31日

解説協力：伊藤廣之、平野正裕、米川智司、村上忠喜、卯田宗平、森岡健治、大島幹雄

発行：国立映画アーカイブ

②国立映画アーカイブ「ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー」

講演(2020年10月24日)採録 小松弘「ピクチャレスク・ジャパンー映画を通じた外からのまなざしー」

発行日：2021年3月31日

発行：国立映画アーカイブ

③国立映画アーカイブ「ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー」

講演(2020年10月24日)採録 平野正裕「『日本の祭 横浜開港五十年祭』について」

発行日：2021年3月31日

発行：国立映画アーカイブ

④国立映画アーカイブ「ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー」

講演(2020年10月24日)採録 森岡健治「『日本のアイヌ』の映像について」

発行日：2021年3月31日

発行：国立映画アーカイブ

⑤国立映画アーカイブ「ピクチャレスク・ジャパンー世界が見た明治の日本ー」

講演(2020年10月24日)採録 大島幹雄「1914年日本の軽業師たちーヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像ー」

発行日：2021年3月31日

発行：国立映画アーカイブ

□『MoMAK Films 番外編 ピクチャレスク・ジャパンー

ー世界が見た明治の日本ー』

(2021年1月29日発行)

※ハンドアウト5号の改訂版

フィルムセンター時代の平成25年度に開始した所蔵資料公開事業「NFAJデジタル展示室」については、令和2年度中に第21回公開として「澤村四郎五郎コレクション」の第2回の特集展示を行った。映画関連資料については、映画研究者塚田嘉信氏旧蔵の初期映画資料や、当館所蔵の技術資料等のデジタル化作業を実施した。中でも前年度にデジタル化を実施した戦前の映画雑誌に関しては、平成29年度に図書室内に開設した「デジタル資料閲覧システム」にデータが追加され、さらなる充実を果たした。

＊SNS（Twitter、Facebook、Instagram）で上映、展示、教育事業等の各活動を発信し、本年度はInstagramフォロワー数 1,197人増、Twitterフォロワー数 3,011人増、Facebookアカウントイイネ数600人増の成果をおさめた。

＊HPアクセス件数1,280,048（2020.04.01-2021.03.31）

V 記録

1 予算 Expenditure

1-1 2020年度(令和2年度)歳出予算一覧

事項	予算額(単位：千円)	
一般管理費	121,326	
美術振興事業費	159,977	
ナショナルセンター事業	319,570	
計	600,873	※自己収入54,521千円含む

(2021.3.31現在)

現職

氏名

一般社団法人日本動画協会 理事長

石川 和子

一般社団法人日本映画テレビ技術協会 常任理事

川瀬 功

早稲田大学文学学術院 教授

小松 弘

映画監督、協同組合日本映画監督協会 理事長

崔 洋一

一般社団法人日本映画製作者連盟 会長

島谷 能成

公益社団法人映像文化製作者連盟 理事長

善方 隆

公益財団法人川喜多記念映画文化財団 代表理事

武田 和

一般社団法人日本映像アーキビスト協会 代表理事(会長)

棚木 章

映画史家

平野共余子

映画プロデューサー、株式会社アルタミラピクチャーズ代表取締役

榊井 省志

アテネ・フランセ文化事業株式会社 代表取締役

松本 正道

日本大学芸術学部教授

宮澤 誠一

イメージフォーラム・フェスティバル ディレクター

山下 宏洋

東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授

吉見 俊哉

映画評論家

渡辺 祥子

(50音順)

(2021.3.31現在)

現職	氏名	現職	氏名
館長	岡島 尚志	事務補佐員	横田 小遥
		主任研究員 展示・資料室長	岡田 秀則
総務課		特定研究員	濱田 尚孝
総務課長	紅林 孝彰	客員研究員	本地 陽彦
室長(管理)	荒井 久登	客員研究員	佐崎 順昭
室長(運営)特定専門職員	西田 佳二	研究補佐員	小川 努
係長(総務)	荒井 英俊	事務補佐員	高木 雛
特定専門職員	平野 昌男	事務補佐員	青木 美羽
事務補佐員	丸木 彩乃	事務補佐員	児玉 祥子
事務補佐員	磯上佳月子	事務補佐員	工藤 祥子
係長(会計)(兼)	荒井 久登	事務補佐員	笹沼真理子
一般職員(会計)	中山 仁志	事務補佐員	奥崎 彰子
一般職員(会計)	芦沼 愛実	主任研究員 教育・発信室長	富田 美香
事務補佐員	北尾 望	特定専門員(松竹株式会社)	山本 一郎
事務補佐員	森 友美	特定専門員(株式会社KADOKAWA)	外岡 宏長
事務補佐員	羽生 和代	特定研究員	吉田 夏生
係長(事業)	池田 絵美	研究補佐員	工藤 雅子
事務補佐員	福田 尚子	情報研究補佐員	数原 潔
学芸課			
学芸課長	入江 良郎		
主任研究員 映画室長	大傍 正規		
映写技術士	高屋 吉丘		
特定研究員	江口 浩		
特定研究員	西川 亜希		
研究補佐員	ユエカルダ アロ		
事務補佐員	久保田洋子		
事務補佐員	宮澤 愛		
事務補佐員	根本 里奈		
技能補佐員	大見 正晴		
技能補佐員	根本 道子		
技能補佐員	鈴木 美康		
主任研究員(相模原分館)	三浦 和己		
特定技能職員(株式会社東京現像所)	花村 敏晴		
特定技能職員(東映株式会社)	荒木 市郎		
事務補佐員	稲垣 晴夏		
技能補佐員	小川 芳正		
技能補佐員	村木 恵里		
技能補佐員	渡辺 登		
技能補佐員	飯野 浩		
技能補佐員	柳 千亜紀		
技能補佐員	土屋摩利子		
事務補佐員	猪股 真菜		
主任研究員 上映室長	大澤 浄		
特定研究員	玉田 健太		
特定研究員	森宗 厚子		
客員研究員	佐野 亨		
研究補佐員	具 珉珂		

令和 2 年度
国立映画アーカイブ活動報告

発 行： 国立映画アーカイブ
東京都中央区京橋 3-7-6
電話 03-3561-0823
印 刷： ヤマノ印刷株式会社
発行日： 令和 4 年 3 月 30 日

■非売品

2020 Annual Report
National Film Archive of Japan

Published by:
National Film Archive of Japan ©2022
3-7-6 Kyoubashi, Chuo-ku, Tokyo, Japan
Phone: +81 (0) 3-3561-0823
Printed by: Yamano Printing Co., Ltd.

Printed in Japan

■ Not for sale